
勇者の息子と魔王の娘？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の息子と魔王の娘？

【Nコード】

N4933W

【作者名】

まあ

【あらすじ】

剣と魔法が飛び交い、ドレイクやオーガと言った魔族から人間は身を守るように寄り添い生きていく。人間が束になってもかなわない魔族と対等に戦う人間。それを人々は勇者と呼ぶ。しかし、この主人公は勇者をこういう『勇者？ あんなもの、ただの住所不定無職』だと。

自サイト『悠久に舞う桜』、『光と影』にもリンクしています。

第1話

『勇者』

それは誰もが憧れる職業。

『勇者』

それは魔族や魔物と言った人間に恐怖や絶望を与える者達と戦い弱き者を守る者。

しかし、この物語の主人公は『勇者を尊敬する事は無い』

なぜなら……

主人公にとって勇者は

ただの『ろくでなし』でしかないから。

山奥の小さな村ジオスからこの物語は始まる。この小さな村のはずれに少年が1人住んでいる。少年の名は『ジーク・フィリス』。まだ、幼さの残る顔立ちをしているが1人で山に入り、薬草などを集め、薬を調合する職業についており、誰かに頼るわけでもなく祖母から受け継いだ村の小さな薬屋を営みながら1人で生きている。

(……眠い。やっぱり、昨日は山に入ってきたから、調合なんて後回しにして早く寝れば良かった)

寢室のカーテンを開けると部屋に入ってきた朝日がまぶしかったように表情を小さく歪ませて大きな欠伸をすると、

(……まあ、終わった事をいつまでも言っても仕方ないし、お客さんもくるかも知れないから店を開けるか？……って言ってもくるのは村の年寄り連中しか来ないんだけどな)

身体を大きく1度伸ばした後、いつもとあまり変わらないであろう客層の事を考えて苦笑いを浮かべるとタンスから着替えを引っ張り出して着替え始める。

(……まあ、片づけしないで寝たからな。まあ、このままにしておくわけにもいかないし。片づけるか？……その前に開店と今日も1日頑張りますか？)

着替えを終えて薬を調合している工房に移動すると昨日の調合した後に片づけを行わずに寝てしまったため、荒れている工房を見て昨日の自分の行動に呆れるようなため息を吐いた後に店先のドアにかけてあるプレートを『営業中』に変えて荒れている工房の掃除を開始する。

(……そろそろ、あいつが来るころだな。あいつがくると仕事が進まないから、できれば無視したいんだけど)

ジークは窓から見える太陽の位置を確認するとあまり来て欲しくない客がいるようにため息を吐いた時、ジークの店のドアを「コンコン」と叩く音がし、

「ジーク、頼んだものできている？」

ジークが返事をする前にドアが開き、腰に剣をかけた青いショートヘアと髪と同じ色の瞳が印象的な少女が店のなかに入ってくる。

「できているけどな。今日こそ代金を置いて行けよ」

「もう。ジークは細かいよ。幼なじみの美少女がお願いしているんだから、ここはサービスするところでしょ」

「幼なじみだと言うなら、1人で生計を立てている俺の都合を考える。毎回、代金を踏み倒されて、俺にどう生活をしろと言うんだ？」

少女はジークの1つ年下の幼なじみでこの村の村長の娘の『フィーナ』クローク』であり、彼女は工房で何か面白そうなものはないかといくつかの薬瓶を手に取り始めるとジークはいつも代金を支払わずに店の商品を持って行く彼女に今日こそは代金を払うように言うが彼女は代金を払う気もないようであり、

(……お前、いい加減にしろよ)

ジークはそんな彼女の様子に眉間にしわを寄せながらも祖母が亡くなった時に彼女の父親には世話になった事もあるため、きつくは言えないようで眉間に青筋を浮かべるが、

「ジークこそ、いつまでもこんなお店やってないで、私たちと一緒に行こうよ。魔族や魔獣と言われる魔物の1匹でも倒せば一攫千金、大金持ちも夢じゃないんだよ。村の外には夢も希望も落ちているの。こんな村で遊んでいる理由はないよ」

「……何度も言っているだろ。俺はこの店を続ける。ばあちゃんが守ってきた店が大事だしな」

フィーナは村長の娘のためかわがままに育っているらしくジークの心境など気にする事はなく彼を冒険に誘うがジークは彼女の誘いを拒否し続けており、これ以上は無駄と判断したようで彼女の言葉に反応する事なく店の準備を続けて行く。

「ねえ。どうして、あんたはこんな片田舎から勇者様って呼ばれるまで有名になったおじさんとおばさんの子供なんだよ。その子供のあんたが村から出るわけでもなく、1人でこんな小さなお店で満足しているのよ」

「何度も言わせるな。俺は勇者様なんかに興味はない。周りからいくら騒がれようが、あんなもんだの『住所不定無職』だ」

フィーナは何度誘ってもジークが自分の誘いを拒否するために不満げな声を上げて彼の両親の事を引き合いに出すとジークはフィーナの言葉にでた両親の話に機嫌が悪くなっているようであり、自分の両親をまるで他人を斬り捨てるように言い、

「住所不定無職って、他に言い方があるでしょ？ 何で、そんなに否定的なのよ。おじさんもおばさんも立派な人でしょ。多くの困っている人を魔族や魔物の恐怖から救っているのよ。バカにしないでよ」

「うるせえよ。用が済んだなら代金を置いてさっさと出て行け！！俺はお前の相手をしているほど暇じゃないんだよ！！」

フィーナは何度もこのやり取りを繰り返しているようで肩を落とすがジークはフィーナの相手をするのも限界のようで代金を置いて出て行けと叫ぶ。

「仕方ないな。今日は諦めるよ。また、誘いにくるからね」

「何度きたってかわらない。と言うか、まずは金を払って行け！！
村長には世話になつてから黙っていたが、いい加減にしろ！！
お前がやっているのは窃盗だ！！」

「じゃあね。ジーク……きゃっ!？」

フィーナは勇者と言われている両親の血を引くジークに才能がある
と思つてゐるようで自分が有名になるために絶対に必要と思つてい
る事もあるのか諦めないと言うと店の商品を何点かカバンに詰め込
み店を出て行こうとするがジークは彼女の行動に生活もかかつてい
るため、代金を支払えと怒鳴るが彼女は本当に代金を支払う気はな
く、ジークから逃げるように店を出て行こうとしてドアを開けた時、
店の前には来客なのか少女が立っており、店の外に出たフィーナは
2人と同年代くらいの赤色の綺麗なロングヘアーの少女とぶつかり、
ぶつかったショックで2人は尻もちを付く。

第2話

「だ、大丈夫ですか？」

「は、はい。大丈夫です。ありがとうございます」

ジークはフィーナが尻もちをついたのは自業自得と判断したため、彼女とぶつかった少女に手を伸ばすと少女はジークの行動に少し驚いたような表情をした後、彼の手を握って立ち上がり、

「すみません。急いでいたものでケガは無いですか？」

「わたしは大丈夫です。あの、あなたもケガはないですか？ わたし、治癒魔法は少しは使えますのでケガをしていたら言ってください」

「私は大丈夫です。それでも鍛えていますから」

「そうなんですか？ それは良かったです」

フィーナは自分を優先してくれないジークに不満げな視線を向けるが、明らかに自分が悪い事は理解しているようで少女に頭を下げると少女は自分は明らかかな被害者のはずなのだが彼女の身体を心配して聞き返すとフィーナは魔族を倒して一攫千金を狙っているため、身体は鍛えていると腕まくりをして見せて少女はフィーナの様子に柔和な笑みを浮かべている。

（まあ。とりあえず、ケガはないみたいだな。良かった。しかし、村では見ない顔だな？ 遺跡の探検にきた冒険者かな？ そうなる

と客だな……あれ？」

ジークは2人にケガがない事に一先ずは安心したようで小さく息を漏らすと少女の顔を見て、小さな村のため彼女がこの村の人間ではないと理解すると店にきたお客様だと思い接客に移ろうとするが彼女の綺麗な赤色の髪の間からは人族にはあり得ない2本の小さな角が頭を覗かせており、

（……赤い髪に角が2つ？ えーと、目は金色？ ……えーと、落ち着け、俺、ドレイクがこんな小さな村にくるわけがないじゃないか。獣人の類の人だよな。そうだよな）

ジークは少女の『赤い髪』、『2つの角』、『金色の瞳』と言った特徴が人族に敵対する竜の血を引いていて魔族でも上位の力を秘めており、人族を喰らい、残忍で暴力や殺戮の限りを尽くすと言う『ドレイク』に酷似していると思いつつもフィーナと話す少女の様子にそんなわけないと思いたいようで大きく首を振ると、

「……どうかしましたか？」

「な、何でもないです」

「ジーク、どうしたのよ？ 女の子をそんな風に見たら失礼よ」

少女はジークの行動に小さく首を傾げるとジークは声を裏返して何も無いと言うが頭が今の状況について行けていないようで声を裏返すとフィーナはジークの様子に怪訝そうな表情をするが、

「す、すいません。少しの間、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「はい。わたしはかまいませんけど」

「ちょっと、ジーク、何なのよ？ お客様に失礼でしょ」

ジークは少女に断りを入れるとフィーナを店のなかに引っ張り込み、少女の頭を指差し、

「……フィーナ、失礼って、お前、彼女をもう1度、しっかりと見てみるよ」

「何？ 女の子をそんな風に見るのは失礼よ。まったく、それともあの娘が可愛いから照れてるの？ ……あんた、最低ね」

「良いから見ろ」

「見たってまさに美少女って感じよね。『キレイな赤い髪』に『金色の瞳』に赤い髪に映える『2つの小さな角』？ あれ？ 角？ ……えーと、ちょっと待ってね。状況を理解するから……あれよね？ きつと獣人の類よね？」

「そうだよな？ そうだと良いな……あんな凶悪な存在が大きな国ならまだしもこんな小さな村になんか立ち寄るわけがないよな？」

ジークはフィーナに少女がドレイクかと確認して貰いたいようで少女を見て欲しいと言うがフィーナはその言葉にジークが少女に一目ぼれでもしたと思ったようで不機嫌そうな表情をするとジークはかなり切羽詰まっているようでくだらないやり取りをしている暇はないと言いたげに口調を強くして言い、フィーナはため息を吐いた後に少女に視線を向けるとジークと同じ疑問を持ったようで眉間にし

わを寄せて自分が出した答えを否定したいよううで希望的な答えでジークに同意を求めるとジークは最悪の答えを否定したいよううで大きく頷いた時、

「あの。どうかしましたか？」

「ひゃう！？」

「あ、あのですね。1つ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい。わたしに応えられる事でしたら」

「……」

少女は2人の様子に何か感じたよううで店のドアを開けて首を傾げてジークとフィーナに声をかけるとフィーナは声を裏返し、ジークは少女が仮に自分とフィーナの考えた通りにドレイクだった場合は絶対に逃げきれないためか、確認だけはしよううと決意したよううで少女に聞くと少女は笑顔で頷き、そんな少女の表情にジークは恐怖より恥ずかしさが勝ったよううで彼女から1度、視線を逸らす。

「……ジーク、聞いちゃうの？」

「き、聞かないとどうしようもないだろ」

「だ、だとしてもよ。答えが最悪だったら、どうするのよ？」

「で、でも、逃げられる状況じゃないだろ……出口は塞がれている上にドレイクって言ったら人間を一瞬で消し炭にできるような魔法を無詠唱で使ったりするんだぞ。死ぬなら死ぬで真実くらいは知り

「たいだろ？」

フィーナはジークの様子に彼が決意を決めた事は理解したようだが彼女自身がまだ覚悟はできていないようであり、ジークの腕を肘で突くとジークはすでに生きることすら諦めているようで真実だけでも聞いておきたいと言うと、

「……あのさ。君って、ひょっとして、ドレイクだったりする？」

「はい。生まれて16年、ドレイクをやらせていただいています」

ジークは自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をすると少女に向かい真実を確かめると少女はジークの質問の意味がわからないように小さく首を傾げて、自分はドレイクだと言い、

「……そ、そうですか。ドレイクですか」

「やっぱり、そうなんだ」

「はい。そうですけど、どうかしましたか？」

ジークとフィーナは少女の口から聞こえた自分達が考えた事の最悪の答えに血の気が引いて行くのを感じるが少女自体は2人がどうして自分の種族を気にしているのか理解できないようであり首を傾げたままである。

第3話

「そ、その、ドレイクさんが何かようなのかな？」

「は、はい。そうですね。あ、あの、失礼ですが、お父様とお母様は御在宅でしょうか？」

「い、いや。い、いないよ。うちに帰ってきた事なんてないから、どこかで冒険とかしているんじゃないかな？」

ジークは恐る恐る少女にここにきた理由を尋ねるとどうやらジークの両親に用があるようだが彼の両親は生まれたばかりの彼を祖母に預けて1度も村に帰ってこないため両親はどこで何をしているかはわからないと言うと、

「帰ってきた事がない？　そ、それじゃあ……す、すみません。ジーク＝フィリスさんでよろしいんですね？　名乗るのが遅れてしまい申し訳ありません。私、『ノエリクル＝ダークリード』と言います。ノエルと呼んでください」

「は、はい、ご丁寧にありがとうございます」

「ちょっと、ジーク、あんたは何をしているのよ。あの娘はドレイクなのよ」

「い。いや。わかっているんだけど、なんかあの娘のペースはずれていると言つか、完全に巻き込まれている気がする」

ドレイクの少女は自分を『ノエリクル＝ダークリード』と名乗り、

深々と頭を下げるとジークもつられたようでノエルに向かい合って頭を下げるが、フィーナはこの状況は絶対におかしいためかジークの首をつかみ、耳打ちをするが彼の頭のなかにあったはずの警戒心はノエルのゆったりとした空気に完全に流されている。

「それで、そのドレイクのノエルがおじさんとおばさんに何かようなの？」

「ちょっと、フィーナ、押すなよ！？」

「えーと、あの、わたしは名乗ったんですが、何と御呼びしたらよろしいんですか？ あのできればお名前を教えていただけないでしょうか？」

フィーナはノエルを警戒しているようで敵意の視線を込めながらも絶対に自分程度では敵わない事も本能が理解しているため、ジークの背中に隠れて彼女にジークの両親を訪ねてきた理由を聞くとノエルはフィーナの事をなんと呼んでいいのかわからないようで行儀よく聞き返し、

「フィ、フィーナ」クロークよ」

「フィーナさんですね。よろしく願います」

「えーと、こちらこそよろしく願います」

「……フィーナ、お前だつて俺と同じじゃないか」

「し、仕方ないでしょ。そ、それより、ジーク、この娘、何なの？ ペースが崩されるわ。意味がわからないわ」

フィーナは警戒しながらも逆らって彼女の逆鱗に触れるわけにはいかない判断したようで名前を名乗り、ノエルはジークに名乗った時と同様に深々と頭を下げるとフィーナもノエルにつられて、ジークの後ろから出てきて深々と頭を下げ、ジークはフィーナの様子にため息を吐くとフィーナはノエルと言うドレイクが彼女の持つドレイクからかけ離れすぎているためか眉間にしわを寄せてぶつぶつと言いはじめ。

「俺に聞くなよ。それでノエルはこの村にと言うか、俺の両親に何の用？」

「は、はい。私がここにきたのは、ジークさんのご両親に無駄な火種を起こして欲しくないからです」

「無駄な火種？」

「はい。えーと、ジークさんのご両親だけではないのですが、部族間で違いはありますけど、基本的に私達は争いを好みません。それなのにドレイクだから、魔族だからと言われて多くの仲間達が争いに巻き込まれているんです」

「へ？」

「どうかしましたか？」

ジークはノエルの様子にすでに完全に警戒心は取り払われてしまったのか先ほどまでは恐る恐る使っていた敬語も止めて、彼女にこの村を訪れた理由をもう一度聞くと彼女の口から出た言葉は自分やフィーナの持っているドレイクの印象とは異なり、世界平和や種族間

の争いを止めたいと言った理由であり、予想の斜め上に行くノエルの回答にジークとフィーナは間の抜けた表情をするとノエルは2人の反応の意味がわからないようで首を傾げ、

「ちょ、ちよつと待ってくれ！！ ドレイクは人間に敵対していて俺達人間を餌とかくらいにしか考えてないんじゃないのか？」

「それは大きな勘違いですよ。わたし達ドレイクは竜族の血をひいていると言われているため、攻撃性に特化しているとか凶暴だとかは言われますけど、わたし達にだって文明はありますし、家畜の飼育くらいはしていますよ。人族のお肉なんて食べません。それはあれです。ふーひょーひがいです」

「風評被害？」

「そうです。それです」

「……そうなの？ でも、文献にはドレイクは人族の血肉を好むって」

ジークは自分の頭が付いてこないためか驚きの声を上げてノエルに向かい、捲くし立てるようにドレイクに人族は餌でしかないと言うがノエルはそんな事はないと言いたいようで頬を膨らませ、ジークとフィーナはノエルの言葉を信じて良いものかわからないように顔を見合わせた後、フィーナはもう1度、確認したいようにで恐る恐る自分の知っているドレイクの好物が人間だと聞き返すと、

「それは先ほども言いましたが、ドレイクは竜族の血をひいているためか、強さに憧れる人も多くて強い相手の血肉を自分のなかに取り入れ。さらに高みを目指すと言う困った風習がありました」

「そ、それって、おじさんとおばさんを殺しに食べにきたって事！？」

「ち、違います！？ わたしはそんな風習信じていませんし、何より、わたしは菜食主義者ベジタリアンですし」

「……………」

ノエルは申し訳なさそうに目を伏せながらドレイクは強さに憧れているだけだと言うがフィーナはノエルの言葉にやはり、彼女がジークの両親を殺しにきたと思い、声を上げるとノエルは慌てて自分は菜食主義者ベジタリアンだと言い、その言葉はジークとフィーナと言った人族から見ると信じられない事であり、眉間にしわを寄せた後、

「菜食主義者ベジタリアンって事は肉や魚は食べられないのか？」

「はい。健康の事を考えるとお肉やお魚もバランス良く食べないといけないのは理解しているのですが、どうしてもダメで……………」

「…………ベジタリアンなドレイク？ どうしたらいいのかしら、今日で私の中にある常識がすべて崩れて行く気がするわ」

「…………奇遇だな。フィーナ。俺も同じ感想だ」

ジークは目の前にいるノエルと言うドレイクが理解しきれないようでノエルにもう1度、肉類は食べないかと聞くとノエルは申し訳なさそうに言い、彼女の様子にジークとフィーナの持っていたドレイクと言う種族への価値観は破壊され始めている。

第4話

「あの。信じていただけましたか？」

「えーと……」

「信じるから、ジークから離れなさいよ」

ジークとフィーナはドレイクであるノエルが^{ヘジタリアン}菜食主義者だと聞かされて今までの自分達のなかにある常識に顔を引きつらせている姿にノエルは2人に信じて欲しいと上目使いでジークの顔を見上げるとジークはノエルのしぐさにときめいてしまったようで顔を赤くして視線を逸らし、フィーナはそんな彼の様子が面白くないようで不機嫌そうな表情をしてノエルを引き離すと、

「さっきも言ったけど、おじさんもおばさんもここになんて戻ってきた事はないわよ。用が済んだなら帰ってよ」

「そ、それなら、どこにいるかご存じありませんか？ それに帰ってこないと言ってもお手紙くらいはきますよね？」

フィーナの頭の中からはノエルがドレイクだと言う事がすっかり抜け落ちてしまったようで^{ライバル}恋敵を威嚇するように用が済んだなら帰れと言い、ノエルはどうしてもジークの両親と話をしたいと言って両親に会う手がかりを教えて欲しいと言うと、

「いや、生まれて今まで1度もきた事はないよ。ばあちゃんが言ってたけど生まれた俺を置きに帰ってきた後は顔も見に来た事もないし、俺は2人の顔も知らないよ」

「ジークさんが生まれてからって、そんな、酷いです……親子なのにどうしてですか？」

ジークは両親にあった事はなく居場所にも心当たりはないと苦笑いを浮かべて言うがその様子はどこか寂しげであり、寂しげに笑う彼の表情と彼の口から出た言葉でノエルはおかしな感情移入をしてしまったのかボロボロと大粒の涙を流し泣き始め、

「ちょっと、何でノエルが泣くのさ!？」

「だ、だって、ジークさんが、ジークさんが」

「名前を連呼して泣かないでよ!？ 俺が何かしたみたいじゃないか!？」

「……これはお客さんが来たら大変な事になるわね。ノエル、入口に立ってないで店に入って」

ジークはノエルの反応にどうしたら良いかわからずに慌てるとフィーナはため息を吐いてノエルを店のなかに招き入れるとドアのプレートを『準備中』に替える。

「……えーと、一先ず、これでも飲んで落ち着いてくれるかな」
「ず、ずびません」

「……涙脆いドレイク？ なんか頭痛いわ。ジーク、遊んでないで、タオルとかハンカチとか持って来られないの？ 泣いている女の子の顔をいつまでも見ているなんてデリカシーにかけるわよ。ハンカチなんて気の利いたものをジークが持っているわけないからタオル

とかノエルの顔を拭くものを持ってきなさいよ」

「そ、そうだな。ちょっと、行ってくる」

ジークはノエルの泣き顔にどうして良いかわからずにキッチンに向かうと温めたお茶を差し出し、彼女はお茶を受け取るがその顔は涙と鼻水で、すでにぐちゃぐちゃになっており、フィーナは頭を押さえながらもジークを1度、店から追い出し、

「ノエルが泣く事でもないでしょ。ジーク自身が気にしてないんだから」

「で、ですけど、そんなの悲しいです。さびしいです」

「……そう言う風に泣いてくれるのは嬉しいんだけどさ。実際はフィーナの言う通り気にしてないから泣きやんでくれないかな？　こうやって泣かれている方が気不味いんだけど」

フィーナはノエルに泣きやむように言うが彼女は酷く涙脆いようでいくら手で涙をいくら拭っても止まる事はなくフィーナが諦めかけた時、ジークは奥からタオルをもって戻ってくると困ったような笑みを浮かべてノエルの頬をタオルで拭いた後に彼女の頭を撫で、

「でも、辛くないんですか？」

「どうかな？　さっきも話した通り、両親の顔は1度も見た事ないしね。知らないんだ。辛いと思った事はないよ。ばあちゃんから話は聞いているからどんな人なりをしているかは知っているけど、それに1人で生きて行くのに悲しんでいる暇はないよ。代金を踏み倒す迷惑な幼なじみもいるし」

「ちょっと、どうして、そこで話を折るのよ!？」

ノエルは涙目でジークの顔を見上げるとジークは彼女の顔を直視できないように視線を逸らしながらも冗談交じりで辛くないと言うと引き合いにされたフィーナが面白いわけもなく頬を膨らませ、ノエルはジークの気づかいに小さく頬を染めるが、

「お1人なんですか？ あ、あの、おばあ様は？」

「ああ。ばあちゃんは……」

「ちょっと、ジーク!？ それを言ったら、ダメよ!？」

「1年前に死んだよ……」

「そ、そんな……」

もう1つでてきた疑問に首をかしげ、ジークは祖母が死んだと言う事実を伝えると再び、ノエルは大量の涙を流し始め、

「……バカジーク」

「し、仕方ないだろ!？ こうなるなんて思わないだろ!？ それより、フィーナ、どうにかしろよ。俺はこんな時にどうしたらいいかわからないぞ!？」

「……ジーク、あんたは少しの間、出て行つて」

「お、おう。任せた」

フィーナには祖母が死んだ事を言つとノエルが泣きだす事は予想出来たようで止めようとしたのだがジークは考えも無しに言ってしまった事に頭を押さえるとジークはどうして良いかわからずに慌てはじめ、フィーナは役立たずのジークにここは任せるように言つとジークはノエルをフィーナに任せて逃げるように店の外にある薬草を育てている小さな畑に向かう。

第5話

（……フィーナから始まってノエルか？ 今日は何なんだ？ まだ、朝なのにこんな調子だと他にもおかしい事が起きそうな気がする。って言うか、何なんだよ。親父もお袋も帰ってこないならせめて、俺の迷惑にならないように行動しろよな）

ジークは店内から出ると今日はおかしな事しか起きていないせいか頭を押さえて腰を下ろすと今日の原因を会った事のない両親のせいにしてため息を吐き、

（まあ、何もしないでいるヒマはないよな。取り合えずは薬草に水でもやるか？ 遊んでいる余裕はないからな）

販売用の治療薬の材料である薬草の世話をするために立ち上がると、

「ん。居た。ジーク、今日は店を開けないのか？ 店の前に行ったら準備中になっているから、まだ、寝てるのかと思っただぞ」

村で小さな冒険者の店兼宿屋『赤い月亭』を営業している青年『シルド・ホーク』がジークを呼ぶ。

「シルドさん、ちょっと、いろいろありまして、店は準備中です」

「いろいろ？ また、フィーナが店の商品を勝手に持ち出して売り物がなくなっただとか？」

「……それもありました。あまりにいろいろありすぎてすっかり忘れてた。今日こそ、代金を回収しないと」

ジークはシルドを見て営業スマイルで返事をするがジークと同じく接客業をしているシルドの目は誤魔化す事は出来ず、シルドは苦笑いを浮かべながらフィーナと何かあったかと聞くとジークは肩を落としながら大きなため息を吐き、

「相変わらず、仲が良いな。そろそろ進展の1つでもしたらどうだ？」

「……冗談は止めてください。あいつはただの幼なじみです。それも俺の事を心配1つしないで迷惑かける厄介な」

シルドは変わらないジークとフィーナの距離に苦笑いを浮かべたまま聞くとジークはフィーナを恋愛対象とは全く見ていないようでもう1度、ため息を吐く。

「ジーク、鈍いのか目を逸らしているのかどっちだ？」

「どちらでもありませんよ。あいつが俺をどう思っようが俺には恋愛感情なんてありませんよ。俺から見れば昔から人の後ろを追いかけてしつこい印象しかないんですから、昔はそれでも妹みたいには思っていましたけど、今は人の生活を脅かす厄介ものです」

「……確かに興味を引きたいからとは言ってもやりすぎて感じもするが、全てを理解していてその反応もどうなんだ？ それはフィーナにとってはあまりに酷だぞ」

「そうかも知れませんが、こればかりは仕方無いですね。少なくとも迷惑をかけ続けている相手を簡単に好きになるほど俺は殊勝では無いですよ。それで、朝から店にくるなんて何かありましたか？

いつも受けている薬湯なら今月分はこの間、納めたばかりですね」

シルドはジークの様子にジークが鈍いのかどうかを確認するとジークはフィーナの気持ちも知っている上で恋愛対象外と言い切り、シルドはそんなジークの様子にため息を吐き、これ以上はこの話を続けて欲しくないためかシルドが自分の店を訪れた理由を聞く。

「ああ。それなんだけど、この間から小さな地震があるだろ？」

「ええ、揺れ自体はたいした大きくはないですけど、ずいぶん長い間、続くって感じのですね？」

「ああ、先日、うちの宿に泊まった冒険者が言っていたんだけどな。村から1日歩いたところに小さな遺跡があるだろ？ その1部の壁が崩れて奥に繋がる道が出てきたらしいんだ。それでウチにも冒険者達が押し寄せると思ってな。薬湯の追加発注を頼もうと思ってな」

「へえ、遺跡か？ 奥に何があるのかな？」

「ん？ 興味があるのか？」

「まあ。遺跡の奥には菌類とか薬に使えるものもありますからね。最近の遺跡にも行ってないし、俺主も行ってこようかな？」

シルドはジークに遺跡がさらに続いていた事を知った冒険者達を期待した先行投資だと言い、宿屋で使う薬湯を追加するとジークは大口の取引に頬を綻ばせながらも遺跡の中にあるかも知れない薬の材料に興味を持ったようであり、そこから繋がる金の匂いに目を輝か

せると、

「……お前の實力は知っているけどな。先に行って荒らしてくるなよ。うちの売り上げにも関係してくるんだからな。だいたい、金を稼ぎたいだけなら、冒険者になれよ。おじさんとおばさんの血をひいているだけあって、この辺の冒険者なら余裕で倒せるだろ」

「わかっていますよ。俺は基本的に遺跡の中にどんな強力な武具が有ったって興味なんかないんですから、だけど、本の中でしか見た事のないような薬草があれば新しい薬が作れますしね。輸入物の無駄に高くて効果が安定しないものより、良い薬が作れば良い儲けになりますしね」

シルドは勇者として名高いジークの両親の血を引いたジークの實力に遺跡は全て暴かれてしまうと危惧するがジークは苦笑いを浮かべながらそんなものに興味はないと言い切り、

「それじゃあ。昨日、仕入れてきた薬草を調査したら商品を持って行きますんでよろしくお願いしますね」

「ああ。わかったよ。その代わり、さっきも言ったが、遺跡の中を荒らすなよ。名産もない小さな村なんだ。遺跡探検に來た冒険者が数少ない商売相手なんだからな」

「わかってますよ。それはウチも一緒ですから」

ジークは遠出をする時はシルドに良く売れる商品を預けているようでシルドに商品の販売を頼み、シルドは再度、ジークに念を押すと自分の宿屋に戻って行くのをジークは見送ると、

「遺跡の中には薬の材料になるようなものがあれば良いんだけど、
そうと決まれば速いところ残りの調合を終わらせて………あ！？」
ノ、ノエルは泣きやんでいるかな？ ま、まあ、覗いてみるか？」

薬の調合を始めようとするが店の中でノエルが泣いている事を思い
出してため息を吐く。

第6話

「……あのさ。見られると集中ができないんだけど」

「す、すみません。でも、わたし、お薬を作っているところを見たことがないので」

「……わかったよ。その代わり、見ていても面白い事はないと思うよ」

「……ねえ。ジーク、調合を始めたのは良いけど、もう少しゆつくりとしても良いんじゃないの？ 急いでいるみたいだけど何かあったの？」

ジークはノエルが泣きやんでいる事を確認すると調合部屋に入り、薬の調合を始め出すとノエルは薬の調合に興味があるのか調合部屋を覗いており、フィーナはジークとノエルを2人つきりにするわけにはいかないと思っており、ノエルと一緒にジークを置いておくわけにはいかないと思っているようで嫉妬混じりの視線で調合部屋を覗き込んでおり、フィーナはやる気になっているジークの様子に何かを感じたようでどうしたのかと聞くと、

「ああ。さっき、シルドさんから遺跡の奥に行ける道が見つかったって話を聞いてな」

「へえ、あの遺跡の奥に新たな遺跡ね。知らなかったわ」

「……フィーナ、お前、一応は冒険者の端くれだろ」

「う、うるさいわよ。私みたいな優秀な人間が行くにはレベルが低すぎるのよ」

「……口だけでは何とでも言えるよな」

ジークはシルドから聞いた遺跡の話をするがフィーナは初耳だったようで少し驚いたような表情をするとジークは彼女を小バカにするように言い、フィーナは直ぐに反論するがジークは彼女を口だけ冒険者だと言った時、

「その遺跡って有名なんですか？」

「有名って言うか、こちら辺のモンスターは大人しいしね。冒険者を志す人間が力試しに行くような。小さな遺跡だよ……」と言うか、2人ともいつまでここに居るつもりなんだ？」

遺跡の事を初めて聞いたノエルは首を傾げ、ジークはそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべると危険な遺跡では無い事を話した後、ノエルとフィーナがいつまでこの店にいるつもりなのかと聞く。

「あ、あの。ご迷惑ですか？」

「迷惑と言うか、ノエルは俺の両親を探しているんだろ。ここにいたって無駄だよ」

「で、ですけど、闇雲に探すよりはここで待っていた方が会える可能性が高いと思うんです」

「……いや、そうじゃなくてさ」

ノエルは不安そうな表情でジークを見るとジークは少し気まずそうな表情をしながらもノエルにこの場所にいる理由はないと言うとノエルはここで彼の両親を待ちたいと言いだし、ジークは世間からかなりずれている彼女の言葉に肩を落とすと、

「ここで待つって言ってもさつきも言ったけど、あのろくでなし夫婦はここになんて絶対に帰ってこないよ。それに君はドレイクなんだ。人間の村に居て何か騒ぎになったらどうするんだよ」

「騒ぎですか？ わたしは話し合いにきたんですから騒ぎなんか起こしませんよ」

「……だから、そう言う意味じゃなくてさ」

ノエルにこの村にいるのは良くないと言うがノエルはジークの言いたい事の意味など理解できないように首を傾げる。

「確かにね。私もジークも、流石にノエルと騒ぎを起こすつもりはないけど、他の人間はそうもいかないよね？」

「ああ、ただでさえ、もう直ぐ、遺跡探索だとか言って冒険者達が押し寄せてくるんだ。ドレイクが村の中を闊歩していたら……下手したら、村が壊滅する」

「そうね。大きな都市からノエルを殺しに来る可能性が高いわ」

フィーナはノエルの様子にため息を吐きながらもジークが言いたい事がわかるようで真面目な表情をしてノエルに言い、ジークは何もなくても村にきた冒険者が大きな街に持ち帰った情報からノエルの討伐隊を組まれる時の事を思い浮かべたようであり、フィーナは規

模が大きすぎる話だとは一瞬考えるが、人間にとってのドレイクが与える恐怖を考えるとジークの言う事は間違っていないと言つと、

「ですけど、わたしは人族と友好関係を結びにきたんです。騒ぎなんて起こしませんよ」

「……いやね。ノエルがそんな事を考えても周りはそう思わないから」

「そうね」

「どうしてですか？」

「普通に考えれば、そうだろ。それができたなら、人族とドレイクの争いなんて起きないんだからさ」

ノエルは自分は戦いではなく話し合いに来たともう1度、声を大きくして言うがジークとフィーナは人間の視点から見ればそんな事は絶対に成り立たないと言い、

「ですから、それを变えて行きたいんです！！ 種族間の争いは何も生みません。話しあつて仲良くなれば協力できる事だつてあるはずです」

「まあ、それをやろうとするのは素晴らしい事なのかも知れないけどさ。だけど、それは理想でしかないよ。そんな理想だけで誰かが動くなら、こんな世の中にはなりはしない。だいたい、同じ、人間同士でだつてくだらない殺し合いをしているんだ。個人でとならまだしも、種族として考えた時に違ふ種族となんてわかりあえるわけがないよ。生活、考え、全てが違ふんだ」

「そ、そんな事はないです」

ノエルは本当に人族とドレイクとの争いを治めたいようで真面目な表情をするがジークとそれは絶対に無理だと言い切るとノエルはジークの言葉に反論しようとするが、

「それじゃあ、悪いんだけど、2人とも出てっってくれるかな。俺はいつまでも2人と遊んでいる暇はないんでね。調合の邪魔もされたくないから、店を出る時にプレートは『準備中』のままにしておいてくれ」

「ちょっと、ジーク」

「ジークさん」

ジークはこれ以上、話に付き合う義理もないと思っているようで2人に調合部屋のドアを閉めるように言い、調合に専念しはじめ、2人は納得がかなそうには見えるが邪魔はできないためかドアを閉め、

「……まったく、人族とドレイクや他の魔族が争わない世界なんてできるわけではないだろ。でも……そんな世界になったら、2人は帰ってきて、ばあちゃんの墓に手でも合わせてくれるかな？ ……止めよう。考えたって仕方無い事だ。仮にそんな事になっても2人が戻ってくる事はないんだ」

ジークはノエルの理想の世界なら自分のように両親に捨てられるような人間が減るかも知れないと考えたようだが直ぐにその言葉を飲み込むと調合を再開させて行く。

第7話

「……結局、2人はここで何をやっているんだ？」

「何って、見てわからない？ 店番よ。ジークが調査している間にお客さんが来て大変だったのよ」

「……いや、その前にノエルに店番をさせるなよ。騒ぎになったらどうするつもりだよ」

「それくらい、私だって考えたわよ。だけど、みんながみんな冒険者ってわけじゃないでしょ。うちの村は特にお年寄りばかりだからドレイクなんて本物を見た事ない人間が多いから、あの角を装飾品くらいにしかみな思っていないのよ。気づくとしたら、シルドさんやシルドさんのお店に泊まってる冒険者の人達、後は元冒険者の私のお父さんくらいよ」

「……今更だけど、平和な村だな」

「……ええ、緊張感もあつたもんじゃないわ」

ジークは調査を終えてドアを開けると店の方から声が聞こえ、店を覗くとノエルとフィーナはなぜか店番を行っており、ノエルに至ってはドレイクの象徴である頭の角を隠す事なく、村のお年寄りの接客を行っているため、ジークは今の状況に頭が点いてこないのか眉間にしわを寄せるがノエルがドレイクである事など村のお年寄りは気づいてもいないようであり、2人は大きなため息を吐くと、

「ジーク、いつの間にこんな良い子をつまえたんだい？ これであ

んたの将来を心配して死んで行つたばあさんも報われるね」

「フィーナちゃん、あたしはあんたを応援しているからね。いきなり現れた子にジークを取られるんじゃないよ」

「……違うからね。おかしい勘違いはいらないから」

お年寄り達はノエルとフィーナをジークの嫁候補と認識しているようで無責任に煽りだし、ジークは頭が痛くなってきたようで頭を押さえてお年寄り達の言葉を否定するが、

「な、何を言っているんですか！？ わ、わたしとジークさんはそんな関係じゃありません！？ ジークさんにはフィーナさんがお似合いだと思います！！」

「もう、この子は可愛いね。そうやって顔を赤らめるなんてね。あたしはこっちの子の味方をさせて貰おうかな？」

店に来ていたお年寄り達は完全に煽りに入っているようでノエル派とフィーナ派に分かれており、

「……もう良いよ。悪いんだけど、俺、薬の材料探しに行きたいから、特に用がないなら店を閉めたいんだけど……」

「まったく、わざわざ、こんな村はずれまで歩いてきた年寄りを追い出すって言うのかい？ この子はどうしてこんな冷たく育ってしまったのかね」

「……少なくとも世話にはなっただけど育てて貰った記憶はないから、それにフィーナもそうだけど、ここにお茶を飲みに来られても困る

んだよ。俺にだって俺の生活があるんだから、俺に稼ぎがなくなっても誰も養ってくれないだろ」

「さてと、ジークも忙しい良いみたいだし、あたし達も帰ろうか？」

ジークは薬草探しに出たいと言うとお年寄り達から苦情が出るがジークは大きなため息を吐いて生活を援助してくれるのかと言うとお年寄り達はジークの話を聞こえないと言いたげに店を出て行き、

「……まったく……って、店の物を持ってくなー!!」

「あの、フィーナさん、このお店って……」

「良いのよ。ここはそう言うお店だから」

お年寄り達は店を出て行く時に当たり前のように代金を払う事なく商品を持って行き、ジークはお年寄り達を追いかけて店を出て行き、ノエルはジークとお年寄り達の様子に顔を引きつらせるがフィーナは自分も良くジークの店から勝手に商品を持って行くためか表情を変える事なく言い切ると、

「そんなわけないじゃないですか!？ ジークさんはここのお店が大切だって言うのはおばあ様の事もありますし、わかるじゃないですか。お店を維持するのってお金がかかるんじゃないですか？」

「そうかもね。だけど、私もおばあちゃんもジークがここに縛られるのって望んじやないから」

ノエルはジークの気持ちを考えて欲しいと言うがフィーナはジークには自分と一緒に冒険者なって欲しいと思っているため、自分の考

えをジークの祖母の考えだと決めつけて言う。

「……まったく、フィーナもそうだけど、何なんだよ。と言うか自分達は年寄りだって言うなら、店の外から全力で走って居なくなるなよ」

「ジークさん、あの。お店って大丈夫なんですか？」

「ん？　どうかした？」

ジークは店に戻ってくると逃げて行ったお年寄り達を捕まえる事が出来なかったようで眉間にしわを寄せて帰ってくるとノエルはジークの店を心配しているようで不安そうな表情でジークに声をかけるがジークは特に気にした様子もなく首を傾げると、

「お店って潰れたりしませんよね？」

「……ノエル、どうしてそんな不吉な事を言うんだ？」

「だ、だって、お金を払わないで商品を持って行く人もいますし」

「まあ、確かにそれは困りものだけど、代わりに野菜とか食料も貰ったりしているからな……なかには代わりのもの1つ持ってこない奴もいるけど」

「何よ？　かわいい幼なじみが顔を出してるのよ。それだけで充分にジークのためになってるでしょ」

ノエルは不安そうな表情のまま店が潰れないかと聞き、ジークは眉間にしわを寄せながらノエルにおかしな考えに至った理由を聞くと

納得が言ったようで彼女に心配するなと言う意味を込めて彼女の頭を撫で、他の客とは違い何も持つてこないフィーナを責めるように視線を向けるがフィーナは自分は悪くないと言いたいようでジークを睨み返す。

「１番厄介なのが幼なじみなんだからな。１人だけだし、どうにかなる……って、だから、泣かないでくれ!？」

「で、ですけど……」

「だ、大丈夫だから、頼むから、これ以上、泣かれると……」

「そうそう、ジーク、うちの畑にできた野菜を後で取りに……これは修羅場？ お邪魔したみたいだね」

ノエルはジークは心配ないと言うが彼女の頭の中ではジークの店が潰れる事しか考えられないようでジークに抱きついて泣きだし、ジークはそんな彼女の様子に慌てて泣きやむように言った時に先ほど逃げて行ったお年寄りの１人がタイミングよく店のドアを開けるとジークとノエルの様子を見て生温かい目で２人を見た後、そつとドアを閉め、

「待て!？ 勘違いだから!？」

「何も言わなくて良いんだよ」

ジークはこの状況を村に広められるわけにはいかないため、お年寄りを追いかけようとするがノエルを引き離す事もできないため追いかける事も出来なく、

「……今日は厄日だ」

「へえ、可愛いノエルに抱きつかれて厄日？ ジーク、あんた何様よ？」

ジークは肩を落としてため息を吐くとノエルに抱きつかれているジークをフィーナは笑顔ではあるが殺気混じりの視線で睨みつける。

第8話

「ジークさん、すいませんでした」

「……できれば、もう止めて欲しい。と言うか、小さな村だから商品を持ってシルドさんの店に行くのが怖いんだよな。あ。ノエル、悪いんだけど、その赤い瓶を3つ取ってくれるかい？」

「これですか？」

「ん。ありがとう」

「……」

ノエルが泣きやんだため、ジークは薬草探しに行く前に先ほどシルドに頼まれた商品をシルドの店に届けようと思ったようで商品をまとめている様子をフィーナはジークがノエルと仲が良さそうに話している姿が気に入らないようで不機嫌そうな表情で見ているがジークはフィーナ無視して作業を続けており、

「これで発注された商品は全部だな。ノエル、ありがとう。助かったよ」

「い、いえ、こちらこそ、先ほどからご迷惑をかけてばかりですし、これくらいはお手伝いしないと」

「俺はシルドさんの店に商品を持って行くから、店から出てって……なあ、ノエル」

「はい。なんですか？」

ジークはノエルが手伝ってくれたためか思ったより、商品を用意する時間がかからなかったため、ノエルに頭を下げるとノエルはジークに迷惑をかけてしまったため、彼女もジークに向かい深々と頭を下げるとジークはそんな彼女の姿に苦笑いを浮かべるとシルドの店に出かけようとするが今までの流れが妙にしつくりときていたが店の外に1歩足を踏み出そうとした時に冷静になったようでノエルの名前を呼ぶと彼女は首を傾げる。

「さっきの話に戻るんだけど、ノエルはこの村に居座るつもりなのか？」

「はい。迷惑でしょうか？」

「いや、それは冒険者に見つからなければ問題はない気もしてきたんだけど……どこに住む気？」

「できれば、ここに置いて頂きたいのですけど」

ジークは調合室で話していたノエルが村に居座る場合はどこに住むのかと聞くとノエルは何も考えていないのかジークの家に居候させて欲しいと言つと、

「そんな事を許すわけにいかないでしょ……！」

「どうしてですか？」

「当然でしょ。何かあったらどうするつもりよ」

フィーナは声を上げてノエルがジークの家に住む事を反対し始めるがノエルは意味がわからないように首を傾げている。

「……ノエル、いきなり何を言い出すんだ？」

「ですけど、わたしはジークさんのご両親に用があるわけですし、ここにいた方が都合がいいわけで、それにわたし、お店番しますし、お店番が居れば勝手に商品を持って行く人もいなくなりますし、これでお店が潰れなくて済みます」

「……いや、潰れないから、そこまで酷い経営状況じゃなからな。村の人達以外の冒険者の人達は常識があるからちゃんとお金を払ってくれるし」

「むしろ、ノエルが手伝うと人件費がかかるから潰れるんじゃないの？」

ジークはノエルの言葉にため息を吐くと彼女は自分はジークの両親に用があるのとジークの店が潰れないようにと手伝いをすると言い始め、ジークはそこまで心配されなくても良いと言うとフィーナはジークが先ほどからノエルの事を気にかけている事が気に入らないようにノエルの手伝いでこの店が潰れるんじゃないかと笑う。

「そんなわけないだろ。1人や2人の給料くらいだせる。ノエル、わかった。ばあちゃんの家を片付けるから、ここにいろ」

「ありがとうございます。お世話になります」

「あつ！？」

ジークはフィーナの言葉に意地になったようでノエルを住み込みで雇うと言ってしまったノエルは嬉しそうに頭を下げ、ジークは直ぐに冷静になったようだが既に遅く、

「バカジーク」

「……言うな。俺はシルドさんの店に行ってくるから、フィーナは用がないなら帰れよ。ノエルはなんか適当にしてくれ。シルドさんに商品を届けたら1度、戻ってくるから、その後にもう1度、よく話をしよう」

「は、はい。わかりました」

フィーナはジークをジト目で見るとジークはため息を吐いた後にノエルに後で詳しい話をすると言い、ノエルの返事を聞くと店を出て行き、

「ノエル、とりあえず、部屋を片付けようか？」

「勝手にお部屋に入って良いんでしょうか？」

「まあ、大丈夫でしょ。私もジークが大切にしているものくらいはわかるしね。それに……片付かないでノエルがジークの部屋で寝るとかなくても困るし。うちに泊められればジークと何か起きるような事はないと思うけど、お父さんが相手だとノエルの正体ばれるだろうし」

「フィーナさん、どうかしましたか？」

「な、何でもないわよ!? ジークがおかしな事をしようとしても

困るから部屋のドアに鍵とかも付けないといけないからね。ノエルの部屋になるなら雑貨屋も見えてこないといけないからね。女の子が住むんだから」

フィーナはノエルとジークに何かあっても困るため、ノエルをジークから守るために部屋を片付けると言う店奥にあるジークの家に入って行き、ノエルはジークがいないのに勝手な事をして良いのかわからないが1人でいるのは不安なようでフィーナの後を付いて行く。

第9話

「シルドさん、注文の品を持ってきました」

「お。ずいぶんと早かったな」

「……これ、置いておきます」

ジークはシルドの経営している冒険者の店兼宿屋『赤い月亭』を訪れるとカウンターで料理の下準備をしていたシルドと数名の冒険者達は何かあるのかジークを見てニヤニヤと笑っており、ジークはシルドの表情にすでにこの店は敵陣だと言う事を理解したようでカウンターテーブルに持ってきた商品を置くと逃げるように店を出ようとするが、

「まあ、ゆっくりして行けよ。お茶くらいは奢るからさ。何なら、お茶菓子も付けるから」

「い、いや、俺は遺跡の奥に行ってくるんで、あまり遅くなると……」

「愛しの美少女が心配すると」

（…………逃げられそうにもないよな）

しかし、シルドがジークの首をつかみ、シルドの様子にジークは自分の考えが確信に変わったようで時間がないと言って逃げ出そうとするのだが店のなかに陣取っている冒険者達はカウンター近くに集まり、ジークを逃がさないように距離を詰めた組みと出入り口を固

めている組みの2つに分かれてジークの逃げ道を塞いでおり、ジークは自分が不利だと理解し、顔を引きつらせると、

「そう身構えるなよ。別に獲って食おうってわけじゃないんだ」

「……確実に食い物にしている目ですよ」

「そりゃあな。あれだけフィーナのアタックから逃げていると思ったら、いつの間にか通い妻だぞ。詳しく聞く必要があるだろ？」

「……違いますからね」

シルドのところにも先ほどのお年寄り達に見られたノエルの様子が伝わっているようでシルドは楽しそうな表情で言々とジークは諦めたようでカウター席に座り、ジークの前にはシルドからお茶が出され、出入り口を固めていた冒険者達もジークの話を聞くためにカウターそばの席まで移動し、ジークは完全に玩具にされる事が理解出来るため、大きなため息を吐く。

「なら、何なんだ？」

「何か、うちの住所不定無職に話したい事があるみたいなんですけど」

「お前の両親に？　ここに居たって無駄だろ。俺だって赤ん坊のお前をこの村に連れて帰って来た時から1度も帰ってきたって聞いてないし、見た事もないぞ」

「そうなんですよ。それも話したんですけど、住所不定無職ですからね。居る場所もわからないし、うちで待っていた方がまだ会える

かもしれないと言い始めて」

「そうやって引きとめて、自分のものにするつもりか？……ジーク、お前はそんな風に頭を使う人間だったんだな。お兄さんはお前を見そこなったぞ」

「いや、男とはそう言うものだ。ジークの成長に乾杯だ！！」

「……違いますからね。成り行きですから、それで俺も困っているわけです」

シルドは否定するジークにノエルがドレイクと言う事を伏せながら自分の両親に会いにきたと言うがシルドもジークの両親には会った記憶が曖昧なようで首を傾げるとジークはノエルとのやり取りを思い出してきたようで深いため息を吐くがシルドや冒険者達はより話を面白い方向に持って行きたいようでジークの策略だと言い始めるとジークはこれ以上は付き合えきれないと言いたげに立ち上がり、

「シルドさん、商品、お願いします。俺はもう行きますんで」

「ああ、わかっているけどな……ジーク」

「何ですか？　これ以上、おかしい事は聞きませんよ」

「まあ、そう言うな。うちの村は若い人間が少ないんだ……村のためにも逃がすなよ。それにお前の反応を見ると満更でもなさそうだしな」

「……だから、違うって言ってますよね」

店に戻ろうとするとシルドは真面目な表情をしてジークを呼び止めるがやはり、ジークをからかう事でしかなくジークは力なく笑うと店を出て行く。

第10話

（……まったく、どうして、あの人は俺をからかう事しか考えないんだよ。確かにノエルはちょっと……いや、かなり、可愛かったけど、会って直ぐにそんな事になるわけがないだろ。それに彼女はドレイクなんだからあり得ないだろ？）

ジークは店に戻る途中でシルド達から言われた事にため息を吐きながらもノエルの顔が頭によぎったように顔が熱を帯びて行くのに気づくがノエルはドレイクだと思いだして首を振り、自分の考えを振り払い、

（……しかし、どうすりゃ良いんだ？ ドレイクだって知れ渡つたら、下手したらうちの村、王都から討伐隊や有名どころの勇者御一行様とかがきて村ごと潰されるぞ。だからと言って、ノエルは村を出てきそうにないし……と言うか説得できる自信がない）

ノエルが村にいる事で考えられる最悪の事態が思い浮かんだように村から追い出す方法を考えようとするが彼女の泣き顔が目には浮かんだように自分にはどうしようもできないと思ってしまったようにため息を吐くと、

（……一先ずは目立つあの角を隠す事を考えないといけないよな？ あれを隠せばそれなりにごまかせるかも知れないんだけど、どうすれば良いかな？）

ノエルを村から追い出す事より、ドレイクだと隠す事に考えを変えようと始め、眉間にしわを寄せながら歩いていると店の前に着き、

「……どうするかな？」

「どうするって何かあったんですか？」

「お帰り、いつまでも遊んでいるんじゃないわよ。早く片づけを手伝いなさいよ」

ため息を吐きながら店のドアを開けるとエプロンをつけたノエルとフィーナがジークを出迎える。

「……何をしているんだ？」

「何って、後片づけに決っているでしょ。おばあちゃんの部屋、物置にはなってなかったけど、ジークの事だから掃除はまともにしてないと思ったら案の定だったからね」

「掃除？ フィーナが？ ノエル、フィーナは物を壊さなかったか？」

「えーと、だ、大丈夫です。何も壊れてないです」

ジークは2人の様子に眉間にしわを寄せるとフィーナはため息を吐くがジークはフィーナに掃除などできるわけないと思っているようでノエルに聞くとノエルは申し訳なさそうな表情をし、

「……やっぱり、フィーナ、お前はガサツなんだから店の物を触るな。ったく、おばあちゃんの大切にしてたものだってあるんだ。お前に壊されてたまるかよ」

「な、何よ。私だって、少しくらい手伝おうと思ったのに、だいた

い、そんな事を言うなら、掃除くらいしておきなさいよ」

「ジ、ジークさん、フィーナさんはわたしのために」

ジークは頭を押さえるとフィーナにおかしな事をするなと言うとフィーナは不満そうな表情をしてジークが悪いと言いだし、2人の間にはピリピリとした空気が漂い始めるとノエルは2人の間に割って入るが、

「ノエル、甘やかすな。だいたい、俺の経験上、こいつに関わるよろくな事がない。悪いけど、片づけは俺1人でやるから、奥に入ってくるな。フィーナはお前は邪魔だから帰れ。ったく、今日中に遺跡に行つて来たかつたのに無理じゃないか。余計な事ばかりしやがつて」

ジークはシルドの店でからかわれた事もあるせいかイライラしているようで迷惑な行動しかないフィーナの相手をしたくないようである1人で奥の部屋に入つて行く。

「フィ、フィーナさん？」

「……大丈夫よ。慣れているから」

ノエルはフィーナがジークの言葉に眉間にしわを寄せているのを見てフィーナに声をかけるがフィーナは自分の怒りを落ち着かせるために大きく深呼吸をすると、

「私、帰るわ。ノエル、ジークにおかしな事をされそうになったら、全力で攻撃しなさい。消し炭にしてもかまわないわ」

「おかしい事ですか？」

「……良いわ。ノエルのそんな顔を見ていると毒気を抜かれる」

ノエルにジークに襲われそうになったら、躊躇する事なく攻撃しろ
と言うがノエルは意味がわかってないようで首を傾げており、フィ
ーナはノエルの様子にため息を吐き、

「私は一先ず帰るわ」

「は、はい。今日はお世話になりました」

フィーナは自分の家に帰ると言いノエルはフィーナに頭を下げる。

第11話

（……まったく、何をやってたら、ここまで荒らせるんだ？　まめに掃除はしてなかったけど、少なくとも荒れてはいなかっただろ？　…
…これは本当に今日中に遺跡探索は無理だな。せつかくのチャンスなのに冒険者が入ると薬草類も取られるし、知識のない冒険者なら貴重な薬草も平気で踏みつぶして行くからなあ）

ジークは祖母の部屋のドアを開けると部屋は予想以上に散らかっており、大きく肩を落としてため息を吐き、フィーナへの怒りを感じながらも片付けを始めようとすると、

「あ、あの。ジークさん」

「どうかした？」

「わ、わたしもお手伝いしたいんです。こんな風になるとは思っていますでしたし、あ、あの。すいませでした」

ノエルがフィーナを止める事が出来なかった事もあるため、申し訳なさそうな表情で部屋の中を覗き込み、ジークは彼女に何かあったかと聞くとノエルはジークに頭を下げて掃除を手伝わせて欲しいと言うが、

「……良いよ。ここはばあちゃんの部屋だし、あまり触って欲しくないものもあるから、だから、なるべく、そのままにしておきたかったつてもあるし、それでもばあちゃんの服とかは有っても仕方ないし、他にも片付けないといけないものがあるから、選別もしないといけないから……まあ、ここまで、荒されると思い出も何もあ

ったもんじゃないかも知れないけどさ。それでもね。懐かしむものはあるんだよ」

「す、すいません。わ、わたし、何も知らなかったので、そ、そんなに大切なものがあるなんて思わなかったので、フィーナさんも気にしないで良いって言ってましたし」

ジークはこの部屋には物以上に祖母との思い出が詰まっているため、他人であるノエルやフィーナのような幼なじみであつても触れて欲しくないものがあるため、1人で片づけをしたいようであり、幼い頃のジークと彼の祖母が並んだ写真の入った写真立て手に取り、写真を撮った時の事を思い出したのか当時を思い出しているのか祖母の事を思い出して優しいげな笑みを浮かべながらもノエルの言葉を否定するとノエルはジークの様子に彼が怒っていると思ったよう不安そうな表情でジークに頭を下げる。

「……いや、ノエルが謝る事じゃないよ。それを知っているのにフィーナがここに入ってきたんだろ？から、さつきも言ったけど、この部屋には俺とばあちゃんの思い出もあるからね。あいつはこの部屋や店が俺をこの村に縛り付けているとか勝手に思い込んでいるんだろ。だから、この店を辞めさせたいんだろ？けど、俺的にはそれだけじゃないんだよ……やっぱり、手伝って貰おうかな。しばらくはここにいるならここはノエルの家になるわけだし、家族は支え合うものだからね」

「は、はい。何から始めたらいいですか？」

ジークは自分の考えを祖母の意見だと言って我が物顔でジークの家を荒らしまわるフィーナに怒りは感じているがノエルに当たるわけにはいかないため、彼女に気にしないで欲しいと言うがノエルの表

情は晴れず、ジークはそんな彼女を見て彼女を元気づけようと思っ
たように笑顔を見せると考え直したと言ってノエルに部屋の片付け
を手伝って欲しいと言うとはノエルは顔を上げて返事をし、2人で
部屋を片付け始める。

第12話

「い、いただきます」

「^{ベジタリアン}菜食主義者って言うていたから肉と魚は使ってないけど、口に合うかな？」

片付けを終えると日も暮れてきたため、ジークは夕飯を用意するとノエルは今まで見た事のないメニューのためか遠慮がちに箸を伸ばし、そんな彼女の様子にジークは苦笑いを浮かべながら聞き、

「お、美味しいです」

「そう。それなら良かった」

ノエルはジークの料理を食べて目を輝かせるとジークは嬉しそうな表情を見せて自分も食事を始め、

（1人じゃない夕飯か？ 久しぶりかな？ ばあちゃんが死んだ後はしばらくは村のみんなが気を使ってくれてたけど、もう1人の夕飯も慣れたと思ってたんだけどな）

「あの。ジークさん、どうかしましたか？」

「あ。ごめん。こんなのも久しぶりだと思ってさ。1人じゃない夕食って久しぶりだから」

ジークは目の前でジークの作った料理を美味しそうに頬張るノエルの姿に祖母と一緒に食卓を囲んでいた事を思い出したようで少しだ

け表情を緩ませた時、ノエルはジークの視線に気づいてジークの料理の美味しさに休む事なく箸を動かしていた事が恥ずかしいと思っ
たようで気まずそうな表情をし、ジークはそんな彼女のかわいらしい
様子に苦笑いを浮かべて考えていた事を素直に話す。

「そうなんですか？ あ、の、フィーナさんと一緒にお夕飯を食べた
りはしないんですか？」

「しないな。だいたい、あいつと2人で飯なんてうるさくてゆっく
りもできないしね」

「あまり、そう言う事は言わないで上げてください」

ノエルはフィーナと一緒に夕飯を食べていてもおかしくないと思っ
たようだがジークはフィーナと夕飯はあり得ないと言うとノエルは
くすくすと笑うが、

「ノエル、あのさ。家に住むのはかまわないんだけど、と言うか、
君がドレイクだって考えると下手に動き回るよりは家にいた方が良
いんだけど、1つ、どうにかしないといけない事があってさ」

「何でしょうか？」

ジークはノエルとこれから彼女が村に住むと考えた時に話をしてお
かないといけない事があるため、言いにくそうに話し始めるとノエ
ルはジークが言いたい事がまったくわからないように首を傾げ、

「いや、俺もノエルに会うまではドレイクって種族に偏見を持って
たから良い難いんだけど、たぶん、ノエルがここにいるって知れる
と問題になるんだ。最悪、この村は潰されちゃうかも知れない」

「ど、どうしてですか!？」

「いや、ノエルも言っただろ。人間とドレイクには戦争の歴史があるからね。多くの人間はノエルを含めたドレイクに敵意を持つ。うちの村の年寄り連中はノエルがドレイクだって事に気づきもしなかったけど、遺跡の奥にまだ遺跡が続いているって事がわかったから、しばらくは冒険者が溢れてくる。冒険者が相手だとノエルがドレイクだって気づく人間が出てくるから、そうするとこの村にドレイクがいると王都に連絡が入り、もしかしたら討伐隊が編成されてくるかも知れないし、村の人はノエルに協力した裏切り者だと言って殺されてしまうかも知れないんだ」

「村の 사람들이 殺されてしまう? …… すいません。そんな事、考えもしませんでした」

ジークはノエルが村に居座る事の危険さを彼女に話すとノエルは事の重大性に気づいたようで顔を青くする。

第13話

「それで、人前に出る時は角を隠せないかな？　と思つてさ。それを隠すだけでもできれば良いと思つてさ」

「角を隠すですか？」

「うん。角はドレイクの象徴だしね。角を隠すだけでもどうにかなると思つんだけど……」

ジークはノエルを人族の村に置くのにカモフラージュのために彼女の2本の角を隠したいと言うが角はドレイクの象徴でもあるため、ジークはノエルが怒るのではないかと少し緊張したように言つと、

「えーと、それなら、折っちゃいましょうか？」

「……」

ノエルは怒るところかドレイクの象徴である角を簡単に折ると言い始め、想像すらしていなかった言葉にジークは言葉を失つてしまうが、

「そうしましょう。ジークさん、ご飯を食べ終わったら協力してください」

「ちょ、ちょっと待って。今、頭を整理するから」

「どうかしましたか？」

ノエルは角を折る事に抵抗がないようであっさりと言うとジークはどうしたら良いかわからないようで顔を引きつらせるとノエルはジークの表情を見て首を傾げる。

「どうかしたじゃなくてね。あのさ。ドレイクにとって角って大切なんじゃないの？　話では冒険者に角を折られたドレイクは怒りで街を一夜にして滅ぼしたとか聞いた事もあるよ」

「えーと、確かにそう言う人もいますけど、この角って折れても生えますし」

「……はい？」

ノエルに角は大切なものではないかと聞くがノエルはジークの言葉の意味がわからないようで首を傾げるとジークは改めて聞かされた事実が信じられないようで呆氣に取られたような表情をすると、

「……えーと、もう1度、今のところを言っただけでも良いかな？」

「ご飯を食べ終わったら協力してください？」

自分の耳を疑ったようでノエルに角が折れた件をもう1度、聞いたように確認するとノエルはジークの言葉に首を傾げたまま、もう1度、角を折るのに協力して欲しいと言うが、

「もうちょっと後」

「どうかしました？」

「おいしい。もう一声」

「この角って折れても生えますし」

「そこ……！」

「どこですか？」

ジークは聞いたかった言葉ではなく、何度かノエルとの会話を続け、確認したかった言葉で声をあげるがノエルはジークが何に食いついているかわからないようであり、

「つ、角って再生するの？」

「はい。それがどうかしましたか？」

「……いや、さっきも言ったけど怒りで街を滅ぼしたとか、冒険者に角を折られたドレイクとかの噂ってのは多いだろ。それにやっぱり、その角はドレイクの象徴だし、簡単に折って良いものなの？」

ジークはノエルに真相を確かめようと真剣な表情をして聞くがノエルの反応は薄く、ジークはもう1度、角を折られたドレイクが起こした有名な話をする。

「角を折られたドレイクのお話はわたしもいくつか聞いた事がありますけど、角を折った人の武勇を認めてその長さに調節しているドレイクもいますよ。先ほども言いましたけど、わたし達ドレイクは強さには憧れや敬意も持ってますから、もしかしたら、その人達は何か卑怯な事をされて角を折られたのかも知れません」

「そう言う事もあるのか？」

「少なくともわたしの伯父様は人族の方に角を折られた事を誇りに思っていました。良き武人に出会えたと」

「……ドレイクってただの戦闘好きなのか？」

ノエルはジークの話のようなドレイクばかりではないと言うと自分の伯父はその時の話を誇らしげに語ってくれたと言い、ジークは自分が持っていたドレイク像がノエルと話をする事で今日1日で崩れ去っているため大きく肩を落とすと、

「それじゃあ、角を折る事には何の抵抗もないって事で良いのか？」

「はい。問題ないです」

「それじゃあ、夕飯を食べてからだね」

「はい。お願いします」

ジークはもう1度、確認するようにノエルに聞きノエルは笑顔で言い切ると食事を再開させるがジークは何かいろいろと納得が行かないようで眉間にしわを寄せる。

第14話

「ノエル、折るって言っても簡単に折れるものじゃないよね？」

「そうですね。こんなに硬いとは思いませんでした」

夕飯を終えてしばらくするとジークとノエルはノエルの頭に生えている角に折ろうとするがドレイクの象徴とまで言われている角は当然堅く、折れる事はおろかひびや傷すら付かないため2人は大きなため息を吐くと、

「そりゃそうだよな。実際は人族の冒険者で勇者とか英雄とか言われる人間が正面からぶつかってようやく折れるようなものなんだし、俺じゃ、無理だ」

「ですけど、これがあると不味いんですよね？」

「ああ、少なくともウチの村の人間以外には見せるわけにはいいかな。いよ。だけど、今は村に多くの冒険者が集まってくるわけだし」

「そ、それなら、その冒険者さん達がいなくなるような状況になれば問題がないんでしょうか？」

「まあ、そうだろうけどどうするつもり？ …… って、それは不味いだろ。それに冒険者の数が減るとウチの儲けがなくなるんだ。生活ができなくなる」

ジークは改めて考えると自分の力量ではできるはずもないがノエルが村の中にいるのは不味いため、困ったように考えをまとめようと

頭を乱暴にかくとノエルは首を傾げながら冒険者が集まらないようにすれば良いと言うとジークはノエルの言いたい事が理解できたようだ。だがそれをするとなエルを雇うのは難しくなると言う。

「ジークさん、お願いします。わたしにはここに残っているしか手がかりがないんです」

「だけどさ……」

「だ、ダメでしょうか？」

「……わかったよ。でも、俺はウチの両親と違ってたいした戦いの才能はないから直ぐに奥まで行けるとは限らないけどな」

ノエルにもノエルの目的があるため、この村でジークの両親を待っていたいと涙目でジークの顔を見上げ、ジークはノエルから視線を逸らそうとするがノエルはジークの視線を追いかけないように動き、それを何度か繰り返した後、ジークは他にいい考えも浮かばないため、ノエルの言葉に頷くと、

「あ、ありがとうございます。ジークさん」

「ノ、ノエル！？ 落ち着け！？ この状況はいろいろと不味い！？」

「……ジーク、ずいぶん楽しそうね」

ノエルは嬉しさのあまりジークに抱きつきジークはノエルの突然の行動に顔を真っ赤にして放れるように言うがノエルはジークが慌てている理由がわからないようで首を傾げていると後ろから怒りのこもった声が聞こえ、

「フィ、フィーナ、お前、何しにきたんだよ!？」

「何？ 決まってるでしょ。あんたから、ノエルを守るためよ。私もここに住むわ」

ジークは壊れた玩具のようにギギと硬い動きで振り返ると額に青筋を浮かべて背後に真っ黒な怒りのオーラをまとったフィーナが立っており、ノエルにライバル心を燃やしているようでジークの家に一緒に住むと言うが、

「は？ 何をわけのわからない事を言っているんだよ？ だいたい、お前はこの村に家があるんだぞ。おじさん達は何を考えてるんだよ!！」

「そんな事は良いから、ノエルから放れなさいよ。このスケベ男!」

「あ、あの。フィーナさんも落ち着いてください」

ジークはフィーナの言いたい事がわからないため、彼女に家に帰るように言うがフィーナはジークの手の中からノエルを引っ張り出すとジークを睨みつけ、ノエルは2人が言い合いを始めた事にどうして良いのかわからないようでおろおろとする。

第15話

(……何か、俺、流されてるよな。まあ、フィーナがいれば一先ずはノエルの事もどうにかしてくれるだろうから、この時間からでも行けるのはありがたいけど)

ノエルが仲裁に入りジークとフィーナのケンカも一先ず、落ち着くとジークは時間が惜しいため部屋に戻り遺跡調査の準備を始めていると、

「ジークさん、ちょっと良いですか？」

「ああ。開いてるよ……おい。フィーナ、これはどう言つつもりだ？」

「どう言つつもり？ 見ればわかるでしょ。私とノエルも一緒に遺跡調査に行くのよ」

ジークの部屋のドアをノエルがノックし、ジークが返事をするとなぜかすでに冒険の準備を終えたノエルとフィーナが部屋に入ってきてジークは眉間にしわを寄せながらこの状況を一緒に行くと言い出したであろうフィーナに聞くが彼女は悪ぶる事な答え、

「それより、早くしなさいよ。何で男のジークが1番準備が遅いのよ」

「フィーナさん、それはわたしもフィーナさんもほとんど持つて行くようなものではありませんし」

「……あのなあ。フィーナ、考えろ。ノエルはお前みたいなガサツな娘じゃないんだぞ。遺跡調査とか危ないところに連れて行けるわけがなだろ」

「誰がガサツよ。それにノエルはドレイクなんですよ。この村までだって1人できたんだから十分な戦力になるでしょ。私やジークより強い可能性の方が高いわよ」

フィーナはジークに早く準備を終わらせるように言っているとジークはノエルを連れて行くわけにはいかないと言うが、フィーナはノエルは充分な戦力になると言い、

「……確かに、ノエルを見ているとそんな気がまったくしないがノエルはドレイクだった」

「ええ。話をするたびに冗談だと思えてくるのが不思議なくらいにね」

ジークはフィーナの言葉でノエルが自分達とは違う事を思い出し、フィーナは話をするたびにノエルがドレイクだと信じられなくなっているようで眉間にしわを寄せ、その話題の中心であるノエルは意味がわからないようで首をかしげているが、

「確かにそうかも知れないけどな。少なからず、冒険者が集まってきているんだ。そんななかでノエルを連れて回るわけにはいかないだろ」

「大丈夫よ。こんな時間に遺跡調査をする人間なんていないから、それより、早くしなさいよ。時間がないんだから」

「だからと言ってもな」

「ジークさん、行きましょう。ジークさんは家族は支え合うものと言ってくれました。わたしのせいでジークさんに迷惑をかけているんです。そんなわたしが今できる事はジークさんをサポートするくらいですから」

「……まったく、今日は何なんだろうな。流されすぎている気がする。まあ、仕方ないか。早く行って終わらせるぞ」

ジークはそれでもドレイクであるノエルが冒険者に見つかる危険を危惧しており、踏み切れずにいるがノエルが笑顔でジークの助けになりたいと言うとジークはしばらく聞く事のなかった自分を家族だという言葉に乱暴に頭をかいた後、2人とともに遺跡に行く許可を出す^{ヤリバー}と薬草採取など1人で山々を歩きまわる時に持ち歩く1対の魔導銃を腰につけると3人で家を後にして遺跡に向かう。

第16話

小さな村のため、日が落ちると街灯がない村では月明かりを頼りに歩くしかなく、村の中ではまた家々から漏れる明かりがあるが村から少し離れた遺跡に向かっていているため、すでに灯りが月明かりとジークが足元を照らすために持ってきたランタンのみである。

「……2人とも足元には気を付けてくれよ」

「わかってるわよ。そう言うジークこそ、足を滑らすとかは止めてよね」

「は、はい。気を付けます!？」

ジークはランタンで足元を照らして歩いているものの3人分の足元を照らすには光度は足りないため、後ろについて歩いているノエルとフィーナに声をかけるとフィーナは心配が要らないと返事をするがノエルは慌てて返事をしたようで足元にあった石を踏み、バランスを崩し、

「……ノエル、言っているそばから転びそうにならないでくれ」

「す、すいません」

ジークはノエルがバランスを崩した事に気づき手をのばして彼女を支えるとノエルは申し訳なさそうに頭を下げるがフィーナの表情は不機嫌そうに頬を膨らませており、

(……面倒だな)

ジークはシルドにも話した通り、フィーナが自分に好意を寄せているのは気づいているため、彼女の反応に肩を落とすが、彼女の行動に何かを言う権利は自分にはないと思っっているため、言いたい言葉を飲み込むと、

「行くよ。遺跡の奥もどうなっているかわからないし、あまり時間も無駄に使うわけにもいかないんだ」

「は、はい。ご迷惑をおかけしています」

ノエルを支えていた手を放すともう1度、先頭に出て足元をランタンで照らしながら歩き始める。

「ねえ。ノエル、暗闇を照らす魔法とかってないの？」

「えーと、魔法はあまり得意ではないので」

「そうなの？ それなら、ノエルって前衛？ でも、これと言った武器を持ってないよね？」

ジークの後ろを歩いていたフィーナはランタンの灯りでは歩きにくいためかノエルに何か魔法はないかと質問をするとノエルはフィーナの質問に申し訳なさそうに魔法は苦手だと言うとフィーナはノエルの装備が前衛で身体を張って戦うような装備ではないため、首を傾げるとノエルは居心地が悪そうに肩をすくめ、

「……俺はここまでノエルが付いてきたから、なるべく考えないようにはしていたんだけど、運動神経も『ない』だろ？」

「は？ ジーク、何をおかしな事を言ってるのよ？ ノエルはドレイクよ。最高種の魔族様よ。それが運動神経がないなんてあるわけがないでしょ」

「あう……あ、あの。フィーナさん、ジークさんの言う通りなんです」

ジークはノエルの様子からあまり考えたくはなかったのだがどうしても確認しないといけないと思ったようであり、ノエルに聞くとフィーナはジークにバカな事を言うなと言うがフィーナのその言葉でノエルはさらに居心地が悪そうな表情をするが言わなければジークとフィーナがまたケンカになると思ったようで小さな声でジークの言葉を肯定し、

「はい？」

「……やっぱりな」

「ちょ、ちょっと待って。ノエルはドレイクでしょ？ それなのに魔法もダメ、運動神経もないってどう言う事よ？ 説明してよ！！」

フィーナはノエルの言葉の意味が理解できないように首を傾げるがジークは大きいため息を吐くとフィーナは慌ててジークとノエルに聞き返す。

第17話

「説明しても何もないだろ。言葉の通りなんだから、それに人には向き不向きがあるんだ。仕方ないだろ」

「仕方ないじゃないわよ！！ それじゃあ、これから、おにも……」

「……フィーナ、それは言うな」

ジークはフィーナの勢いに怯んでしまったノエルを自分の背中後ろに匿うとフィーナは信じられないと言いたいように勢いでノエルを『お荷物』と言おうとするがジークはその言葉を遮り、

「……そうね。ゴメン」

「い、いえ、あの。申し訳ありません」

フィーナは自分が言おうとした言葉がノエルを傷つける事を理解出来るため、言葉を飲み込みノエルに謝るとノエルは自分が悪いと思っっているように申し訳なさそうに目を伏せ、

「さてと、どうするかな？ このまま遺跡に行っても危ないだろうし、1度、戻るか？」

「そ、そんな、わたしのせいでこれ以上、ご迷惑をかけるわけには」

「でも、実際は戦えないノエルがいるのは危険だし」

「だ、大丈夫です。攻撃魔法も前で戦う事もできませんが支援魔法

と回復魔法は少しだけできます」

ジークはノエルを店に戻した方が良かったようで1度、戻ろうと言うがノエルはこれ以上は迷惑をかけられないと言い、それでもいくつかの魔法は使えると言うと、

「何で、攻撃魔法は覚えなかったの？」

「それは当たると痛いですし、ケガしちやいますから、誰だって痛い思いをするのはイヤです」

フィーナはノエルの魔法の選択に偏りがありすぎと思ったようのため息を吐くとノエルは彼女の心優しい性格のせいであり、

「……なんか、治療薬を作るために動物の身体の一部を集めている自分が酷い人間に思えてくるな」

「……言わないで、それを言ったら、私は自分の名声のためにノエルを同じ考えを持っている魔族を殺そうとしていたのよ」

ジークとフィーナは罪悪感を覚えたようであり、ノエルから視線を逸らす。

「あ、あの。ダメでしょうか？ 遺跡に行くのはわたしのわがままなのにジークさんやフィーナさんが危険なところに行くのにわたしは何もしないでいる事なんかできないんです。ですから、お願いします」

「……どうする？」

「……どうする？ って言われてもね。実際、ここまで流されてこの場所に来ている私とジークよ。答えなんて決まっているでしょ？」

「……だよな」

ノエルは深々と頭を下げてジークとフィーナに遺跡に連れて行つて欲しいと頭を下げるとジークは答えをフィーナに丸投げしようとするがフィーナはジークにここまできた経緯を思い出せと言うとジークは苦笑いを浮かべ、

「わかったよ。元々、そんなに危険な遺跡でもないし、ノエルがいても大丈夫だと思うし、その代わり、奥の方は情報がないから、俺かフィーナがノエルを連れて行くのは無理だと思ったら今日は帰る。それで良いな？」

「は、はい。お願いします」

「まあ、仕方ないわね」

ジークはノエルが同行する条件を決めるとノエルは深々と頭を下げてフィーナはノエルの様子に苦笑いを浮かべると、

「それじゃあ、行きましようか？」

「そうだな……後、ノエル」

「は、はい！？ 为什么呢？」

「痛いのはイヤって言うのもわかるけど、自分が危険になったら、攻撃はしないといけない。動物は人を襲う時がある。彼らは生きる

ために人を襲うんだ。そして、人は生きたいから、戦う。それを理解してくれ。ここに情はかけちゃいけないんだ」

「わ、わかりました」

フィーナは改めて出発しようと言うとジークは頷きながらもノエルに向かい戦うと言う事は必ず必要になってくる事だと真剣な表情をして言うとノエルは先ほどまでと表情の違うジークに少し驚いたように慌てて返事をする。

第18話

「……ここが新しい遺跡ね。何があるのかしら？」

「……フィーナ、1人で行くな。だいたい、灯りもないのに覗いたって何もわからないだろ」

「わかってるわよ。それでも雰囲気つてのがあってしょ」

元々、平和な村で周辺に出現する魔物達も大人しいため、特に何事もなく新しい遺跡の入口まで到着するとフィーナは遺跡の入口に立ち、表情を険しくするがジークは彼女の行動にため息を吐くとフィーナは頬を膨らませて反論する。

「一応、少し入った冒険者達言うには魔物達はあまり変わらないけど、中に特殊な能力を持っている亜種がいるような事も行ってたから、2人とも気をつけろよ」

「は、はい」

ジークはシルドの店で少しは遺跡の情報を聞いていたようでノエルとフィーナに注意するように言っているとノエルは大きく返事をするが、

「わかってるわよ。だけど、ただか、この辺の魔物でしょ。私とジークが居れば問題ないわよ」

「……フィーナ、お前と組んだ冒険者が次は誘いたくないって言う理由がわかるぞ」

フィーナは何も心配ないと言い、ジークはフィーナの冒険者としての噂も聞いているようであらうため息を吐くと、

「何よ？」

「……いや、ある程度、冒険者を始めればパーティーって出来上がってくるものなのに未だにフリーなお前の評価だよ。考え足らずで突っ込んでパーティーを危険に導くってな。冒険者で生計をたてたいなら、人の話を聞く事を覚えろよ」

「私が悪いんじゃないわよ。危険かも知れなくても飛びこまないと何もわからない事だつてあるでしょ」

フィーナはジークのため息に不機嫌そうな表情をし、ジークはフィーナの自分勝手な性格は冒険者として致命的だと言うがフィーナは自分には自分の考えがあり、今までの仲間達はそれが理解できなかったと言い切り、遺跡の奥に歩いて行こうとする。

「……それをやるのは不器用でガサツなお前じゃない」

「何よ！？ 放しなさいよ！！」

ジークは灯りを持たずに一人で遺跡の奥に進んで行こうとするフィーナの首をつかむとフィーナは当然、感情でジークを怒鳴りつけるが、

「遺跡の中にはトラップがあるんだ。お前に突っ切られてたまるか」

「何よ？ 入口あたりは他の冒険者が入ったんでしょ。それなら、安全じゃない」

「……お前も冒険者なら頭に止めておけよ。トラップには魔法的なものがあつて解除されても自動で戻るものがあるって、ここはそれだ」

ジークは彼女の迂闊な行動にため息を吐くと今からトラップを解除すると言つて辺りを調べると、

「……これだな。本当なら魔法で根本から解除できれば良いんだけど、そんな魔法は使えないからな」

「これがトラップですか？ ジークさん、これを解除できるんですか？」

岩肌の壁の足元には小さなくぼみがあり、ジークはその近くにランタンを置くと荷物から小さなナイフと言つた小道具を取り出してトラップの解除に入るとノエルはトラップ解除など見た事がないようでジークの後ろから興味深そうに彼の作業を覗き込み、

「ノエル、ちょっと、ランタンを持つて手元を照らしてくれるか？ フィーナ、一応、警戒していてくれ。魔物が襲つてこないとは限らないからな」

「は、はい。わかりました」

「わかつてるわよ。それくらい」

ジークはノエルとフィーナに指示を出すがフィーナは機嫌が悪そうに返事をしながらも周囲の警戒を始め出す。

第19話

「ここをこうすれば……」

「今、カチって音がしましたね」

「……ああ、解除できたみたいだな」

ジークはトラップ解除を行っているトラップはカチッと言う小さな音を立て、ノエルはその音に声をあげるとジークはトラップを解除できたと言って立ち上がり、

「フィーナ、終わったからもう良いぞ」

「ええ……」

ジークは周囲を警戒していたフィーナに声をかけるとフィーナは頷くが何かあるのか歯切れが悪く、

「どうかしたのか？」

「ん？ 何か、おかしい気配がするんだけど、何もいないのよね。奥の遺跡に入ってからずっと見られているような感じなんだけど、そこに行っても何もいないのよ」

ジークはフィーナに何か気になる事があるのかと聞くとフィーナは先ほどから見られているような気配がすると言い、

「な、何かいるんですか？」

「……そんな気がするのよ。でも、これと言って何もいないし、ジークは何も感じない？」

「……確かに言われてみればそんな気もする。それも1つじゃ無く複数の気配、フィーナは確認してきたんだよね？」

ノエルはフィーナの言葉に身を守るようにジークの背後に隠れるとフィーナはこの気配があるから警戒を解きにくいようであり、険しい表情でジークには何も感じないかと言うとジークは目を閉じ、周囲の気配に集中するとその気配は1つではないと言うとフィーナは頷く。

「そうなのよ。それで気配のサイズから言えばたいした強さの魔物でもなさそうだし、気にしなくても良いとは思っただけど……」

「一先ずは気にしても仕方ないだろ。この状況じゃ何も言えないし、敵意もなさそうだろ」

「ええ」

フィーナもどうするか迷っているようで頭をはつきりさせたいのか乱暴に頭をかくとジークは気配の感じから敵意はないと判断したように閉じていた目を開くとフィーナは考えるのが面倒になったようにジークの意見に頷き、

「行きましょう。一先ずは通路はそれなりに広そうだけど、どうする？ ジークの武器を考えれば私が先頭で行く？」

「……いや、さっきも言ったけど、お前はトラップ感知とか向かな

いから遠慮する。ノエルを後ろにすると何かあったら困るから、俺、ノエル、フィーナの順で進もう」

「……わかったわ。ジーク、ノエルの歩く速さにちゃんと合わせなさいよ」

「わかってるよ」

ジークとフィーナは警戒したまま先を進む事を選ぶと遺跡を歩く順番を決め、

「ノエル、行くぞ。ここからは足元が今より悪くなるかも知れないから、気を付けてくれよ」

「は、はい。気を付けます」

「それじゃあ。行くか？ フィーナ、後ろからの警戒を頼むぞ」

ジークは改めて、ノエルに足元に注意するように言い、フィーナには後方の警戒を頼み遺跡に1歩足を踏み出そうとするが、

「わかってるわよ。それより、ジーク、あんた、私を後ろにしたんだからあんたがトラップにかかるとかは止めてよね」

「……気を付けるよ」

フィーナは冒険に対しての好奇心は人一倍あるようで面白くなさそうにジークに言い、ジークはフィーナの様子に苦笑いを浮かべる。

第20話

「……ノエル、フィーナ、止まってくれ」

「ジークさん、どうかしたんですか？」

しばらく、歩いているとジークは何に気づいたようで立ち止まり、後ろを歩いてきている2人を静止する。

「ジーク、何かあった？」

「……ああ。あれ」

「……いるわね。それもうじゃうじゃと」

フィーナはジークに何があったかと聞くとジークは声を抑え気味にして遺跡の奥を指差すと奥にはゴブリンと呼ばれるあまり強い魔族が4匹ほど先を歩いており、フィーナはその様子を見て表情を引き締めると、

「……どうする？ 仕掛ける？」

「……ノエルがいるし、戦闘にならないにこした事はないんだけど」

ゴブリンは先を急いでいるようで振り返る事はなく3人には気づいていないようであり、フィーナは後ろから不意打ちを喰らわせるかと聞くがジークは争いを好まないノエルがいるため、仕掛けて良いものか悩んでいるようで頭をかいた時、

「な、何ですか!？」

「……ねえ。奥に凄いのいる?」

「かもな」

遺跡の奥からは大きな唸り声が響きだし、ノエルは突如聞こえた唸り声にジークの背中に隠れて聞き、ジークとフィーナは今までのような唸り声は聞いた事がないようで眉間にしわを寄せる。

「……ゴブリン程度ならどうにでもなるんだけどね。ドラゴンとか眠ってたら、どうする?」

「ないない。あり得ない。こんなところに……引き返すか?」

「……そうね」

フィーナは先を歩いているゴブリンはジークと2人でなら倒せると言い、冗談交じりで奥にいるのがこんな平和な村にドラゴンとか恐ろしい魔物がいたらどうしようと言い、フィーナの冗談をジークが否定した時、遺跡の奥が赤々と光りを放ち、一緒に大きく息を吐き出すような音が聞こえ、ジークとフィーナは冗談で言った事が現実にあるのではないかと思い、奥にいる物を何か確認せずに帰ろうかと言うが、

「ドラゴンさんですか? お話を聞いて貰えないでしょうか?」

「……あ、あの。ノエルさん、どうして、そんな答えに行きつくのですか?」

ノエルは首を傾げながらドラゴンと話をしてみたいと言い、その言葉にジークは顔を引きつらせる。

「どうしてと言われましても、ドレイクはドラゴンの言葉を理解できますから」

「そ、そうだとしてもね。話にもならず炎のプレスとかを放たれたら終わりよ」

ノエルはドレイクである自分はドラゴンとも話ができると言うがフイーナは流石に無茶があると言うが、

「……流石に無茶だと言いたいけど、ん？　なあ、フイーナ、さっきを見て俺達は勝手にドラゴンがいるかと言ったけど、本当にドラゴンがいると思うか？」

「何が言いたいのよ？」

「いや、今までこの辺にドラゴンがいるって話は聞いた事ないよな？　遺跡の奥で眠っていたとしても昔からいたなら、伝承でも何でもあるだろ？」

「確かにそうよね？　なら、さっきの何よ？」

ジークはノエルの言葉を否定しようとするが実際は奥にドラゴンがいるってのは考えられないと言い、フイーナは少し冷静になったようにジークの言葉に頷くとそれなら、先ほど赤々と光ったのはなんだと言う。

第21話

「……調べるしかないよな？　ここまできて手ぶらでは帰れないし、何がいたかの情報でも買って貰えるかも知れないし」

「……あんたさっきまでビビってたくせにその答えなの？」

ジークは光の正体がわからないなら、確かめるしかないと言うがフイーナはジークの変わりようにため息を吐くと、

「それに先行していたゴブリンが戻ってこない。あまりに強力な何かがいるなら、逃げてくるはずだ」

「……逃げるまでもなく全滅つてのは考えないの？」

「えーと、確かにそれも有りそうですね」

ジークは何か引つかかり始めたようで自分達の前を歩いていたゴブリンが帰ってきてないと言うがノエルフィーナはゴブリンはすでに全滅している可能性だってあると言うが、

「それなら、俺1人で行く。様子を見て戻ってくるから、2人はここで待っていてくれ。で、ある程度、時間が経っても戻ってこない場合は遺跡から出るんだ」

「そ、それはダメです！？　わたしが無茶を言ったんですから、偵察ならわたしが」

「……ノエル、それは酷く不安だから、ジーク、ここで時間つぶし

てるなら行つてよ。あんまり時間が経つと他の冒険者たちがくるわよ」

ジークは引つかかっているものの正体を確認したいようで自分に何かあった時の事を2人に話すがノエルもフィーナもジークの言う事を聞く気はなく、

「……何かあっても知らないぞ」

「だ、大丈夫です」

「まあ、こう言う時のジークの勘に賭けるわよ」

ジークは2人の様子にため息を吐くがノエルは両手を握りしめて気合を入れ、ノエルは幼なじみジークの勘を信じてみると言い、3人は遺跡の奥を今まで以上に警戒して進み始める。

「……やっぱり、おかしいな」

「何がですか？」

3人は先ほど、ゴブリンが立っていた位置まで歩くとジークは小さな声でつぶやくとその声をノエルは聞き逃さなかったようでジークの服をつかむと、

「いや、あの赤い光が仮にドラゴン、もしくは高位の炎の魔法だとしたら、ゴブリンはこの先で焼け死んでいる可能性が高い。全滅はないにしても1匹くらいは逃げ遅れるだろ？ それなのに肉が焼ける臭いがしない。風は奥から流れてるのにだ」

「まあ、確かに道も狭くなってきたるし、ゴブリン程度に後れを取る相手だったら別だけどそうね」

ジークはランタンからろうそくを取り出して空気の流れを確認すると、かすかではあるが奥の方からジーク達が入ってきた方向に風が流れており、そこから、ゴブリンが焼け死んではないと言つとフイーナは歩いている通路が狭くなってきた事に気づき、眉間にしわを寄せ、

「まあ、そうなるとゴブリン達に遺跡のお宝を取られる前に先に進みたいんだけど」

「そう言うな。問題はこの先なんだから、風の流れがどこかで変わつていて臭いがここまで届いていない可能性だってあるんだからな」

「ええ、そうじゃない事を祈りましょう。ノエル、行くわよ」

「は、はい」

フイーナは遺跡の奥にあるであろう宝に期待しているようで少し前のめりになりそうになるがジークはろうそくをランタン内に戻して警戒をしたまま、先に進もうと言い、フイーナは駆け出したい気持ちを抑えて頷き、ノエルに声をかけると彼女は大きく頷く。

第22話

「……それじゃあ、覗いてみるか」

「気、気を付けてください」

赤々と光った辺りまで歩くと道は左曲がりの下がるような通路にな
っており、ジークはギリギリまで歩くと通路を覗き込むが、

「……一先ずは何もないな」

「そうなの？ どうする？ しばらく待つてみる？」

通路の奥をランタンで照らしても通路が続いているだけであり、フ
イーナはこの先をどうするかとジークに聞く。

「ノエル、ドラゴンの気配とかつて感知ってできないのかな？ こ
こから声をかけたら反応があるとか？」

「えーと、一先ずはドラゴンの気配はないですけど、ドラゴン語で
話してみますか？ 今の通路の奥まで聞こえる声だと相当な大声で
叫ばないといけませんけど」

「……いや、それはドラゴン以外にも気付かれるから止めておこう。
つてなると進むしかないか？」

ジークはノエルにドラゴンにコンタクトを取る方法はないかと聞く
とノエルは奥にドラゴンが住まっている事を仮定するとかかなりの大
声を張り上げなければいけないと言い、ジークはノエルの意見を一

先ず保留にするとランタンで通路の先を照らし、覚悟を決めるように深呼吸をした時、

「ノエル、フィーナ、戻れ!!」

「な、何よ。突然!？」

ジークは何かを感じ取ったようでノエルとフィーナを曲がり角に戻すとフィーナは驚きの声をあげるがジークは2人をかばうように覆いかぶさると先ほどまで3人が立っていた場所へは赤々とした炎が見える。

「か、間一髪か？」

「そ、そうかも」

ジークは炎が見えた事で顔を引きつらせるとフィーナもここから先は流石に不味いと言いたげに顔を引きつらせるが、

「あ、あの。ジークさん、フィーナさん、今の炎、たぶん、幻術だと思います」

「げ、幻術？ ど、どうしてそんな事が言えるんだ？」

ノエルは2人と違う答えに行きついたようであり、炎は幻術だと言い、ジークはノエルの言葉が信じられないようで声を裏返して聞き返すと、

「えーと、最初にこの遺跡の奥に入った時にジークさんとフィーナさんは何かおかしい感じがするって」

「ええ、そうだけど、それが直ぐに幻術には繋がらないでしょう?」

「そうなんですけど、それでわたしもその気配に集中していたんですけど……これっていたずら好きの妖精さん達の仕業ではないでしょうか?」

ノエルはこの遺跡の中に入った時から感じる気配に関係していると言つとフィーナは首を傾げるがノエルは予想でしかないと言いたげに妖精がいたずらをしているのではないかと言い、

「待てよ。妖精のいたずらつて割には派手すぎだろ」

「で、ですけど、この遺跡つて長い間、発見されてなかったわけですよ。壁で入口が埋まっていたわけですし」

「ちょっと待って。ノエル、それってさ……久しぶりの来訪者に妖精達が張り切っているって事?」

ジークはノエルの言う妖精のいたずらにしては悪質すぎると言おうとするがノエルは今の遺跡の状況からすでに答えは確信に変わってきたようで苦笑いを浮かべ、フィーナは彼女の様子を見て、ノエルの予想の終着点に気づいて眉間にしわを寄せる。

第23話

「いやいや、そんなオチってあるのか？」

「ジーク、ノエルの言う事が本当なら妖精に失礼よ」

「……失礼で良いだろ」

ジークは眉間にしわを寄せるとなんと行って良いかわからないようであり、

「でも、仮にそうだとしても実際問題、この中に突っ切れるのか？
ノエルを疑うように聞こえるかも知れないけど確証がないわけだしな」

「確かにね。まだ、可能性の問題なんだし」

ジークとフィーナはまだ妖精のいたずらとは思えないようで先を進むのをためらっていると、

「大丈夫です。行きましょう」

「ちょ、ちょっと、ノエル、待って!？」

「ノ、ノエル!？」

ノエルは問題ないと言い、通路に出るとジークとフィーナはノエルを止めようとするが、その時、ノエルに向かい赤々とした炎が襲いかかり、

「大丈夫です」

「ほ、本当だな」

「幻術か？ 私もジークも魔法を使えないから、ノエルがいて良かったのかな？」

炎が消えるとノエルは笑顔で立っており、ジークとフィーナはノエルの周りまで歩いて彼女にケガがないか確認するが彼女の身体や服はどこも焼けていない。

「……何か、納得はいかないんだけど、先には進めるし、行くか？」

「そうね」

「はい。行きましょう」

ジークは眉間にしわを寄せながら先を進むと言うとフィーナもジークと同じく納得しきれていないようで眉間にしわを寄せているがノエルは役に立てた事が嬉しいようで笑顔で返事をする、

「……お、おう」

「……ジーク、あんた、何、考えているの？」

「な、何も考えてない！？ い、行くぞ」

ジークはノエルの笑顔に一瞬、目を奪われ、ジークの反応にフィーナは不機嫌そうにジークに聞くと彼は変に詮索される事を避けたい

ようでランタンで足元を照らしながら歩きだし、ノエルとフィーナはジークの後に続いて歩きはじめ、

「なあ。ノエル、妖精達の気配で何かわかるか？ おかしな幻術で道があるところに道がなくて、道がないところに道があったら困るから」

「……本当に困るわね」

「ジ、ジークさん！？ だ、大丈夫ですか！？ み、見せてください。今、治癒魔法を使いますから」

ジークはノエルに妖精達のいたずらのある場所がわかるか聞いたところでなかなか良い音が響き、ジークは額をぶつけてあまりの痛みで両手で額を押さえてうずくまり、ジークの様子にフィーナはため息を吐き、ノエルはジークを心配するようにジークに駆け寄り、ジークの治療をすると言いが、

「だ、大丈夫。この程度なら治癒魔法をかけて貰うまでもないから、それより、どこに通路があるかわかるか？」

「あ、はい……」

ジークは頭を押さえながらノエルに治癒魔法は必要ないと言いつと行き止まりに来てしまったため、ノエルに魔法で通路を探して欲しいと言つとノエルは返事をした後に気持ちを落ち着けるために大きく深呼吸をし、妖精達の魔力が強いところを探し始め、

「これはノエルがいなかったら、あんだ、何もできなかったわね」

「確かにな……………笑うな」

フィーナはノエルと一緒にだから先に進めると言うとき、ジークは頷きながら持ってきた塗り薬を額に塗ると、フィーナはあまり見ないジークの姿に笑いをこらえており、ジークは少し恥ずかしいようで不機嫌そうに彼女から視線を逸らす。

第24話

「……ジークさん、フィーナさん、たぶん、ですけど、こっちに道があります」

「ノエル、1人で行かないでくれ。灯りがないと転ぶぞ」

「そ、そうですね。す、少し、興奮してしまいました」

ノエルは妖精達の様子から道がある方に進もうとするがジークは彼女を引き留める。

「それじゃあ、戻るか？ あれ？ そう言えば、先を歩いていたゴ布林達はどうしたんだ？ あれも妖精達のいたずらだったのか？」

「ゴ布林にも魔法を使うのがいたんじゃないの？ えーと、確か、ゴ布林の上位種に魔法を使うのがいたような」

「……そう言えば居たな。と言うか、厄介だな」

ジークはランタンを手に先頭に立つと3人で歩き出し、ゴ布林にも魔法を使うものがいた事を思い出して表情を引き締める。

「ジークさん、そこです」

「ここ？ ……ホントだ。何か不思議な感じがするな」

「そうね」

しばらく、歩くとノエルがジークを引き留めて遺跡の壁を指差し、ジークはその壁に手を伸ばすと手は壁の中に消えて行き、3人は今までになかった感覚に苦笑いを浮かべて顔を見合わせ、

「それじゃあ、行くか？」

「は、はい」

「この奥には何があるかしら」

3人は大きく頷くとジークを先頭にして壁をすり抜けて行く。

「広いな……」

「な、何ですか？」

「灯りが点いた？」

ジークはランタンで通路の奥を照らすと通路は先ほどまでの通路より広く、ジークは息を飲んだ時、通路には灯りが付いて行き、

「……招かれてるのか？」

「……おかしな者がいないと良いけどね。ゴブリンにも魔法を使うのがあるかも知れないから戦う事になると厄介だし」

通路に自然に灯りが点いた事にジークはこの先に何があるか予想が付かないように冷たい物が背中を伝い、フィーナも同じ意見のよう
で頷くが、

「ジ、ジークさん、フィーナさん、凄いです。これで足元も確認できますから安心して先を進めますね」

「……」

ノエルは灯りが点いた事が嬉しいようで笑顔を見せて通路の壁の灯りを覗き込み、そんな彼女の様子に苦笑いを浮かべる。

「まあ、行ってみないと何もわからない……ノエル!!」

「は、はい!？」

ジークは先を進もうとした時にジークは何かに気づき、ノエルの名前を呼ぶと彼女の手をつかみ、ノエルを自分の元に引き寄せた時、

「きたわね」

「そう言う事だ」

ノエルが立っていた場所を小さな火球が襲い、フィーナは剣を抜き、ジークはノエルから手を放すと彼女を庇うように立ち、1対の魔導銃を構える。

「ジ、ジークさん、な、何があったんですか？」

「何があったって俺達を邪魔だと思っ奴がいるわけだろ」

「そう言う事よ」

ノエルは何があったかわからないようでジークの服をつかみ、不安

そんな表情を見るとジークとフィーナはノエルに向けて火球を放った者がいるであろう通路の先に視線を向けると、

「……………」

「……………言ってるそばからかよ」

「そうみたいね」

先ほど見たゴブリン4匹がジーク達に敵意をこめた視線を送っており、ジークとフィーナは表情を引き締める。

第25話

「……距離がある上にノエルは攻撃魔法はなし、フィーナ、ノエルの事を頼むぞ」

「了解」

魔法を使うゴブリンは1匹のようで3匹のゴブリンがジーク達に向かい駆け出してくる姿にジークはフィーナにノエルの警護を任せて駆け出して行き、

「ジ、ジークさん！？ フィーナさん、ジークさん1人で危ないんじゃないですか！？」

「ノエル、ジークの心配してるヒマがあつたら、きちんと前を向く」

「は、はい！？」

ノエルは1人で駆け出して行ったジークを追いかけて良いのかと言うがフィーナはジークの心配より、自分の心配をするように言う。

「……魔法を使う奴は流石に遠いか」

ジークは3匹のゴブリンの前に着くと1匹のゴブリンが装備をしていた斧をジークに振り下ろし、ジークは落ち着いているようで難なく、その攻撃を交わし、魔導銃キャリバーの引き金を引くと銃口から光が放たれ、1匹のゴブリンの肩口を撃ち抜き、ゴブリンは痛みに悲鳴を上げ、他の2匹のゴブリンは仲間が攻撃を受けた事にジークへの殺意

をあげる。

（……斧、剣、槍か？ となると少し距離を取りたいけどあまり距離を取りたいけど、これがあるからな）

ジークは3匹のゴブリンの武器を確認し、自分の武器である魔導銃キャリバーとの相性を考えて、3匹との距離を2メートルほど取り、魔導銃を（キャリバー）を構えた時、後ろにいる魔法を使うゴブリンからジークへ向けて火球が放たれ、ジークが火球を交わすのを狙っていたようにジークに向けて槍が突き出される。

「連携を使ってくるのかよ。思っていたより、厄介だな」

しかし、ジークは慌てる事なく、魔導銃キャリバーの引き金を引き、槍を装備しているゴブリンの腕を撃ち抜くと槍の軌道は逸れ、

「一先ずは連携を切らせて貰う」

ジークは着地と同時に足に力を込めて地面を蹴り、踊るように3匹のゴブリンの間を駆け抜けけると3匹のゴブリンの足を撃ち抜いて行く。

「ジークさん、お強いんですね」

「そりゃ、両親が化け物じみた強さだからね。その血を受け継いだ。ジークは血統的に才能の塊よ」

ジークが4匹のゴブリン相手に優位に戦っている姿にノエルは感心したように声を漏らすとフィーナはジークがこんなところで負ける事など考えられないとため息を吐く。

（……ノエルの考えを尊重してやりたいけど、説得ってできなさそうだな。だいたい、言葉が通じないし）

ジークは3匹のゴブリンの足を撃ち抜き、移動力を削った事で戦闘を優位にした事でさらなる余裕が出て事もあり、ノエルの言う人間と魔族との共存を思い出すがゴブリン達は攻撃を緩める気はなく、痛みを堪えながらもジークに向けて攻撃を繰り返していると、

「ジーク、油断しないの。後ろのは魔法を使うんだから、治癒魔法も使ってくるわよ」

「わかってるけど、ノエル、ゴブリンって説得できないのか？ ノエルの話を聞いていると止めを刺すのは気が引けるんだよ」

「あっ！？ は、はい。そうですね。あ、あの。わたし、ノエリクル「ダークリードと言います。少しお話をしたいのですが」

ジークの様子にフィーナが油断をすると言うがジークはノエルにゴブリンの説得を頼めないかと言い、ノエルはゴブリンの説得に移ろうとする。

第26話

「……」

「ジーク」

「一先ずは話は通じてるみたいかな？」

ノエルの呼びかけにジークと対峙していた3匹のゴ布林達は顔を
見合わせ何かを相談し始めたため、ジークは魔導銃キャリバーを腰のホルダに
戻すとゴ布林達を警戒しながらもノエルとフィーナの場所まで戻
る。

「えーと、ジークさん、フィーナさん」

「ん？ わかって貰えた？」

「……後ろのゴ布林さんから裏切り者って、言われました」

ノエルとゴ布林達との会話も終わったようでノエルが2人を呼ぶ
が説得は失敗したようでノエルは残念そうに肩を落とし、

「……えーと」

「……バカジーク、あんた、何で戻ってきてるのよ？」

ジークはノエルの言葉に振り返り、ゴ布林達の様子を見ると回復
魔法で治療を終えたのかゴ布林3匹はこちらに向かい駆け出して
きている。

「い、命を助けたのに！？ この仕打ちかよ！？」

「……すいません」

ジークは慌ててホルダから魔導銃キャリバーを抜くと再度、ゴブリンの前に躍り出て3匹のゴブリンの突撃を止める姿にノエルは申し訳なさそうに頭を下げ、

「……今は、それどころじゃないかな。ノエル、悪いんだけど、あいつらの命を助けてやれる余裕はないわよ」

「は、はい……」

フィーナはジークとゴブリン達の位置を考えるとノエルにも攻撃の手が来る可能性もあるため、短期決戦に持って行こうと判断したようでジークの隣に駆け出して行く。

「フィーナ、ここ、任せても良いか？」

「何？ 考えでもあるの？」

「……やる気があるのはたぶん、後ろの奴だけだ」

「……そう。わかった。って、返事くらい聞きなさいよ！？」

ジークはフィーナが駆け付けてきた事で何か考えがあるのかこの場所を任せると言うとフィーナの返事を待たずに彼女にゴブリン3匹を任せて後方にいる魔法を使用するゴブリンに向けて駆け出して行く、

「まったく、ノエル、ジークが分らず屋をぶっ飛ばしてくる気らしいから戦闘を長引かせるわよ。そうすれば、こっちの3匹は助けられるかも知れないから、だから、支援魔法、防御力が回避力に係ある魔法があつたらお願い」

「は、はい。わかりました」

フィーナは襲いかかってくる3匹のゴブリンの攻撃を剣で弾き返ししながら、ノエルに補助魔法を頼むとノエルは深呼吸をすると魔法の詠唱を開始する。

「まったく、ジーク、上手くやりなさいよ。あんた達も自分の意見くらい持ちなさいよ！！ こっちが引いてるんだから、ノエルの話を聞いてるんだから、後味の悪い戦闘なんかさせないでよ！！」

フィーナは後ろのゴブリンに従っているだけの3匹のゴブリンにイラついているようで怒鳴り散らすと剣を振りまわし、3匹のゴブリンの武器を弾き飛ばし、

「……ノエル、攻撃補助は私、頼んでないんだけど」

「す、すいません！？ ま、間違えました！？」

「……本当に魔法も得意じゃないのね」

「すいません……」

フィーナは自分にかけられた魔法が自分が頼んだものとは違ったため、ノエルに声をかけると彼女は小さく肩を落として謝る。

第27話

「ちくしょう。ぼんぽんと魔法を放つなよ。距離が詰められないだろ」

ジークはフィーナに3匹のゴブリンを任せて魔法を使うゴブリンに向かい駆け出しているが、ゴブリンは接近戦ではジークに分があると思っっているようで彼を近付かせないように魔法を放ち続ける。

「……このまま行けば、魔力は尽きると思うけど、時間が長引くと……そうなるとフィーナが片付けちまうよな」

ジークはゴブリンの魔力が尽きる事を計算に入れようとするがジークは3匹のゴブリンの命は助けてやりたいようにため息を吐くと立ち止まり、

「……ここからは本気だ。説得に応じるまで付き合って貰うぞ」

身体の前までに血液を送り込むために大きく深呼吸をして大量の酸素を肺に取り入れる。

「……壊れるなよ。相棒」

「！？」

立ち止まったジークを見てゴブリンはジークに火球を放つがジークはその火球を魔導銃キャリパーで撃ち抜き、火球は大きな爆発を起こし、予想外のジークの行動に一瞬、ゴブリンは呆けるが彼はその爆発の直前に進み、

(……まずは魔法の発動体である杖を)

ゴブリンの目の前まで駆け寄ると魔導銃キャリバーの銃身で杖を横に打ち払い、ゴブリンの手から杖を弾き落とす。

ゴブリンはジークの攻撃に何があつたかわからないように目で白黒させるがジークは行動を止める事ない。

魔導銃キャリバーを持っていた手を切り返し、魔導銃持ち手の部分をゴブリンの肩に振り下ろすとゴブリンはその攻撃に反応する事はできず、

(……この感触は折れたか？ まあ、殺されるよりはマシだよな)

魔導銃キャリバーを肩に打ち下ろした音とともに何かがゴブリンの骨は折れたのか鈍い音が響き、ゴブリンは痛み之苦悶の表情を浮かべながら膝を付く。

ジークはゴブリンの様子と手に伝わる感触にゴブリンの状況を推測するとノエルと関わったからこそ感じる罪悪感に小さくため息を漏らすと、

「……言葉は通じていないと思うけど、降参してくれると助かる」

魔導銃銃口をゴブリンの額に押し当て言葉が通じないゴブリン相手でも命は奪いたくないと言いたいように爆発ですすだらけになった顔に苦笑いを浮かべる。

「……コウサン？ ワレラトキサマラノアイダデソンナモノガアル
ワケガナイダロ」

「……あれ？ 話せるの？」

「……コノクライハトウゼンダ」

「そうなら、もう少し穏便にしてくれよな」

ゴブリンは降参する気はないようでジークを睨みつけるとゴブリンの口からは発音が多少異なるが人族の言葉が発せられ、ジークは話くらいは聞いて欲しいとため息を吐くと魔導銃キャリバーを腰のホルダに戻す。

「……なぜ、トドメヲササナイ？」

「ノエルも言っただろ。俺達は戦う気はないの。お前は知らないけど、ノエルに泣かれると酷く悪い事をしている気がするんだよ」

「……ドレイクサマニホレタカニンゲンノブンザイデ」

「……そんなじゃない。それで、一先ずは話し合いに乗ってくれ」

ゴブリンはジークがノエルを気にかけている事に1つの答えを導き出し、ジークは眉間にしわを寄せる。

第28話

「……あれだ。人族の使う薬草ってゴブリンに効果があるのか？」

「……正直、やり過ぎたとは思ってるわよ」

ゴブリンのリーダーはジークに膝を屈し、一先ずはノエルと話をし
ており、ジークはフィーナがぶっ飛ばしたゴブリン達の簡単な治療
を始めているのだが自分の持っている傷薬の効果が心配なようで首
を傾げる。

「……イッパンテキナモノハコウカハアル」

「そうか？ それなら良いな。ノエルと……」

「『ギド』」

「フィーナ、魔香草を2人にやってくれ」

「了解」

ゴブリンのリーダーは話をする上で名乗らないのも都合が悪いと思
ったようで『ギド』と名乗り、ジークは2人に使用した魔力を回復
させる貴重な薬草を渡す。

「……ノエルサマ、コノニンゲンハバカナノデスカ？」

「違います。ジークさんは優しいんです」

ギドは魔香草を受け取ると人族と敵対関係にあるはずのゴブリンに治療を施し、貴重な治療薬を渡すジークに眉間にしわを寄せるがノエルはにっこりと笑う。

「それで何ですが」

「……ココマデジツリヨクサヲミセツケラレテイノチヲタスケラレタノデス。コレイジヨウハナニモシマセン」

「ありがとうございます」

ギドはこれ以上の戦闘は無意味だと説得に応じてくれ、ノエルは深々と頭を下げ、

「あのさ。ギド、この遺跡って何があるか知ってるのか？」

「……シラズニキタノカ？」

ジークはギド達は遺跡の奥に何があるか知っているのかと気になったように軽い口調で聞くと何も知らずにジーク達がここにきた事にギドはため息を吐き、

「……成り行きなんだよ」

「そうね」

ジークとフィーナはギドの呆れた様子に彼から視線を逸らす。

「……コレハオマエタチニンゲンニワタスワケニハイカナイモノダ。タチサレ」

「人間が持つてはいけないもの？ あれか。聖剣とか魔剣の類で魔族を倒すために鍛えられた武器とか？」

「ジーク、何くだらない事を言ってるのよ。こんな片田舎にそんな大層なものが眠ってるわけがないでしょ」

「……ソノトオリダ」

ギドの言葉にジークとフィーナは冗談交じりで魔族と戦ったための武器があると言うとギドは2人の言葉を肯定し、ジーク、フィーナは顔を引きつらせるが、

「ジークさん、その武器なら、わたしの角を折れるんじゃないですか？ その武器をジークさんが手に入れば角が生えてきたらまた折れば良いわけですし。これで解決です」

ノエルだけは呑気そうに奥に眠る武器を使えば村に残るために邪魔な角を落とす事ができると喜んでおり、

「……いや、ノエル、それは違うだろ。それもそんな大それた武器で簡単に言うな」

「……ノエルサマ、ナニヲオツシヤレテイルノデスカ？」

「そうなんですか？ だって、ギドさん達が持つてて誰かに襲われて奪われたらまた戦いの火種になりますし、ジークさんの家で保管しといった方が安全じゃないですか？」

ジークとギドはノエルの言葉に彼女の間違いを否定しようとするが

ノエルは何を考えているのか遺跡の奥に眠る武器を片田舎のジークの家で保管しようと言い始める。

第29話

「……あれ？ 俺がおかしいのか？」

「……いや、おかしいのはノエルだと思うわよ」

ジークは眉間にしわを寄せるとフィーナはおかしいのはノエルだと首を振るが

「みなさん、行きましょう」

「ちょっと、ノエル！？」

「ノエルサマ！？」

「……一先ず、追いかけてみましょうか？」

ノエルはこれ以上の良案はないと思っているようで1人で歩きだし、慌ててジークとギドはノエルを追いかけて、フィーナはため息を吐くと残っていた3匹のゴブリンと一緒に遺跡の奥に歩いて行く。

「ギド、この先には行ったのか？」

「マダダ。イキナリ、アカリガツイタノデナ。ウシロヲフリカエルトオマエラガイタノダ」

「……侵入者を感知するものじゃなかったのか？」

ジークとギドは直ぐにノエルを追いかけたはずだが、ノエルには追

いつく事ができず、ジークはギドに遺跡の話を聞くがギド達もまだ奥には足を踏み入れていなかったと首を振り、

「なら、何に反応したんだ？」

「……ニンゲン、キツイテイルカ？ ドウヤラ、ノエルサマタチカラヒキハナサレタヨウダゾ」

「そうか。妖精達のイタズラ。忘れてた。ギドは気付かなかったのか？」

「……ノエルサマノコトニキヲトラレスギタ」

ジークとギドは妖精達が見せている幻術に魅せられている事に気づき舌打ちをして、

「ノエル達は合流していれば良いけどな」

「……ニンゲン、ドウヤラ、ノエルサマタチノコトヲシンパイシテイルヨウハナサソウダゾ」

「……まったく、嫌になるね。ギド、悪いんだけど、支援、頼む。あれだと俺の魔導銃で撃ち抜けるかわからないから」

「……ジョウキョウガジョウキョウダ。シカタナイ」

ジークがノエルとフィーナの事を心配するように呟いた時、ジークとギドの前方から地響きを鳴らしながらジークの身長キヤリバーの倍くらいキヤリバーの大きさの石の人形が2人に向かってきており、ジークは腰のホルダから魔導銃を抜いて構えるとギドに援護を頼み、彼に石の人形の攻

撃が当たらないように前に駆け出し、ギドは杖を構えて魔法詠唱の姿勢に入る。

「……この攻撃を喰らったら、骨は折れるよな」

ジークは目の前の石の人形を見上げると攻撃を喰らった時の事を考えたように顔を引きつらせるが、

「いきなりかよ!? まだ、準備もできてないって」

石の人形の右手はジークを狙って大きく振り下ろされ、ジークはその攻撃を交わす。

「……痛い。まあ、直撃を喰らうよりはマシだけど、ずっと喰らうと流石に不味いぞ」

石の人形が叩いた地面からは石が飛び、小さな石のつぶてがジークを襲う。当然、ジークは石つぶてを交わしきる事はできずにジークの顔には赤く小さな跡が浮かびあがる。

「……やっぱり、^{キャリパー}魔導銃じゃ、ダメージは小さいだろうしな。まあ、やれるだけはやるけどさ。ギド頼みだな」

ジークは石の人形の大振りな攻撃を交わしながら、^{キャリパー}魔導銃の引鉄を引くが^{トリガー}魔導銃から放たれた光は石の人形の身体を撃ち抜く事はできない。

第30話

「……効いてる気がしないけど、どこか、弱点でもあれば良いんだけど」

ジークの予想通り、石の人形の身体は魔導銃キャリバーの攻撃ではダメージを与えられない。

「……打撃は無理だよな？ 絶対に痛いし、魔導銃キャリバーが壊れたら元も子もないし、何より、こいつは俺じゃ直せないからな。出費がでかすぎる」

ジークは魔導銃キャリバーで石の人形を殴りつける事も考えるが商人でもある人間らしく直ぐに経費の計算をして赤字だと判断したようで、

「ギド、いつまでかかる？」

「……ズイブントヨウソウダナ」

後方で魔法の準備をしているギドに聞くとギドは焦燥感の見られないジークの様子にため息を吐く。

「まあ、動き自体は速くもないからね。だけど、その分、1発貰うと終わりだ。早いうちに決めてくれよ」

「……ソウシタイトコロダガソイツヲハカイスルホドノマリヨクラタメルノハジカンガカカル」

ギドは石の人形を破壊するには魔法の威力が不足しているため、時

間がかかるようであり、

「……それじゃあ、しばらくは頑張りますか？」

「……ソウシテクレ」

ジークはため息を吐くと石の人形の攻撃を交わしながら魔導銃キャリバーの引トリ鉄ガイを引いて行き、

「一先ずは、単発で倒せないなら集中攻撃だな。狙うは右足」

魔導銃キャリバーの攻撃では簡単にダメージは与えられないため、1点を狙い打つ事に決めた時、

「当たれ!!」

「つて!?! フィーナ!?!」

フィーナと3匹のゴブリンが姿を現し、フィーナは自分の剣では刃が欠ける事もあるからかゴブリンから斧を借りたようで石の人形の頭を殴り飛ばす。

「吹っ飛ばさないか? 硬いわね」

「待て、硬いの一言で終わらせるな!?!」

フィーナは渾身の1撃だったようで石の人形の動きは止まったがダメージにはなっていないため、舌打ちをするとジークは驚きの声をあげるが、

「うつさいわよ。こう言う相手がいるんだから、魔導銃とかじゃなく、斧とか槍とかにきなさいよ」

「そうじゃないだろ」

フィーナは斧を構えて石の人形の前に立つとジークに武器を変更するように言うがジークはため息を吐く。

「まあ、打撃系が居れば、大部、楽になるか」

「だから、そんなひ弱な武器じゃなくて」

「良いから、構えろよ。時間稼がないとギドの魔法が飛んでこないんだから、お前の攻撃だつてたいしたダメージはなかっただろ」

「魔法を使える仲間が欲しいわね。ノエルと何かするとしてもあの子、攻撃魔法、使えないし」

ジークは魔導銃キャリバーを構えてギドの魔法まで時間を稼がないといけない事を伝えるとフィーナはゴブリンであるギドの魔法だよりと言う状況に人間としてどうなんだと言いたげにため息を吐くが、

「フィーナ、ノエルはドレイクだから……フィーナ、お前達はノエルと合流してないのか？」

「……残念ながらそう言う事、あの子1人は不味いから、ギド、急いでよ。ジーク、ダメージは少なくとも削るわよ」

「ああ」

「ワカッテイル」

この場にノエルだけが集まっていない事に気づき、あまり時間はかけられない事に気づき、全力で石の人形に向かい攻撃を開始する。

第31話

「本当に硬いわね。ノエルの補助魔法があれば楽なのに」

「……いや、少なからず、石の人形のバランスを崩したり欠けさせるだけで十分な攻撃力だと思うぞ」

ジークとフィーナが攻撃を開始してしばらくするとフィーナは碎く事のできない石の人形相手に舌打ちをするが彼女の1撃は重く、ジークだけではダメージを与える事のできなかった石の人形は所々か
け始めている。

「……怪力女」

「ジーク、あんた、何か言った？」

「何も」

ジークは小さな声でフィーナをバカにするように呟くとその声は彼女の耳にも届いており、ジークを睨みつけるがジークは平然と何も
ないと言い切り、

「大部、欠けてきたし、そろそろ、コアなんか見えてきたら嬉しい
んだけどな」

「コア？ 何よ。それ」

「石人形を動かしてる命令系統。生物で言えば心臓と脳の合体した
物。あの石の人形はゴーレムって言う魔導人形だから、必ずあるは

「ずなんだよ」

「まんま、弱点じゃないのよ!? そんなものがあるなら最初に言いなさいよ!!」

ジークはフィーナの攻撃に欠けてきた石の人形の弱点が探し始めるが、

「そんな事を言っただけで見える部分にあるわけないだろ。まさか、フィーナがあんな硬い身体を欠けさせるなんて思わないだろ。流石にまだ見えないか?」

「ジーク、それってどこにあるのよ。そこを壊せば終わりなんですよ」

コアらしき物は石の人形にはまだ見つけられず、小さくため息を吐くとフィーナは時間が惜しいため、そこを狙うと斧を構える。

「わからないけど、普通に考えれば1番守りの堅い胸部分」

「そう。それって心臓部って事でしょ。まったく、無茶な注文をするわね」

「いや、別に狙えとは言っていないぞ。あいつを倒すのはギドの魔法に任せてあるし」

ジークは1番コアがある確率の高い場所を指差すとフィーナは口元を緩ませるがジークはおかしなやる気を出しているフィーナを引き留め、

「それよりは足を狙えよ。あの硬くて重い石の身体を支えてるんだ。動けなくしまえばギドの魔法も当たるだろ」

「何を言ってるのよ！！ 決めたら1点突破よ！！」

「待て！？ あんまり近づくとギドが魔法を撃てないだろ！！」

フィーナに狙いを足に変えるように言うがフィーナは石の人形に向かって駆け出して行く。

「ったく、だから、あいつの世話はいやなんだよ。壊れるなよ」

ジークは舌打ちをすると魔導銃キャリバーの出力を最大まで上げ、

「砕ける！！ 硬いわね！？」

「下がれ。フィーナ」

フィーナは石の人形の胸部を叩きつけるが胸部は欠ける事はなく、石の人形の右腕がフィーナに振り下ろされるとジークの魔導銃キャリバーからは先ほどまでとは明らかに違う輝きの光が放たれ石の人形の右腕を撃ち抜き、石の人形の右腕は粉々になり、

「……やっぱり、壊れたよ」

「ジーク、あんた、危ないわね！？ って、そんな攻撃ができるなら、最初からやりなさいよ！！」

1対の魔導銃キャリバーの片割れは煙をあげ、ジークは大きく肩を落とすがフィーナはジークの攻撃の威力に驚いたようで彼を怒鳴りつける。

第32話

「良いから、下がれよ。ギドの魔法の巻き添えになりたいのか？」

「う、うっさい。それくらい。わかってるわよ」

ジークは銃身から煙をあげている魔導銃キャラバを腰のホルダに戻すと残っている魔導銃を構えながらフィーナに下がらせ、

「何があるかわからないから、こっちは壊せないからな」

「わかってるわよ。気をつければ良いんですよ」

ジークは魔導銃キャラバが壊れた事はフィーナのせいだと言いたげであり、フィーナは少しだけ反省しているのか斧を握り直し、

「—先ずは右足？」

「腕の振りを考えると交わしやすいだろ」

「そうね。援護、よろしく」

2人は石の人形への攻撃箇所を右足に定めるとフィーナは地面を蹴り、石の人形に向かって駆け出して行き、

「……そろそろ、決着かたをつけたいんだけど」

「そうね。流石にしんどいわ」

ジークとフィーナは石の人形の攻撃を交わしながら攻撃を続けているがコアが破壊されない限り動き続ける石の人形相手では2人の体力が続かず、2人の息が上がり始めた時、

「……イクゾ。ヨケロ」

「待ってたぞ」

ギドから火炎球が放たれ、2人は左右に別れて飛び火炎球は石の人形を襲う。

「命中と、これで片付いたわ……ねえ。ジーク」

「何だ？」

「この人形って石よね？」

「そうだな」

ジークとフィーナは火が上がっている石の人形を眺めていると2人はその様子に何か不吉な事が思い浮かんだようであり、

「……石だと熱持っただけだったりするよね？」

「そうだな。コアまで届かないとただ熱くなるだけかな？」

石の人形は赤々と熱をあげており、ジークとフィーナに向かってくる。

「「ギド!?!」」

「……スマナイ。クダケナイトオモワナカタ」

2人は確実に攻撃力の上がつた石の人形に魔法を使ったギドの名前を叫ぶとギド本人も火炎球で石の人形を倒せると思っていたようにで申し訳なさそうに視線を逸らし、

「ど、どうするのよ!! あんなに熱を持っていたら、打撃は効かないわよ。って言うか、攻撃したら火傷するわよ!!」

「ど、どうするんだよ!!」

「ジーク、あんた、もう1発、最大出力で胸部を狙いなさいよ。コアを壊せばどうにかなるでしょ」

「壊れるだろ。修理する手立てもないんだぞ。こいつがないと商売あがったりだ!!」

ジークとフィーナは言い合いを始めながら石の人形の攻撃を交わしており、

「……ヨユウソウダナ」

「「そんなわけない!!」」

ギドは石の人形の攻撃を交わし続けている2人の様子にため息を吐くと2人は声を合せて叫び声をあげた時、石の人形は軋みを上げ始め、

「と、止まった?」

「熱でコアがショートしたか？」

巨大な音を立てて石の人形は地面に膝を付くと前のめりに倒れる。

「……結果オーライ？」

「そんなところかな？」

「……ノエルサマヲサガスゾ」

ジークとフィーナは動かなくなった石の人形と少し距離をとってみているとギドはこれ以上、ここにいるよりはノエルを探しに行くぞ
と言い、

「そうだな。ノエルの方もこんな感じだったら大変だしな」

「そうね」

ジークとフィーナは頷き、ノエルを探しに遺跡の奥を目指して歩き出す。

第33話

「……ギド、ノエルの居場所はわかるか？」

「……ワカッテイレバクロウナドシナイ」

石の人形を倒した後にノエルを探し始めてしばらくするが、妖精の悪戯により道を惑わされるためギド便りであり、ノエルを見つける事は出来ない。

「簡単に二手に分かれるって言っても、俺とフィーナで行くわけにもいかないからな」

「そうなのよね……やっぱり、魔法を覚える必要性があるわね」

「……そう思うなら、俺の肩を叩かないで自分で覚えろよ」

フィーナは今までの魔法をあまり重要視していないため、自分ではなくジークに魔法を覚えてほしいようだが、ジークは大きく肩を落とす。

「……オマエタチハヨウセイノケハイモカンジラレナイノカ？」

「気配くらいは感じられるけど、魔法は使えない」

「ソウカ？ ソレナラバサイノウハアルカモシレナイナ」

ギドはジークとフィーナに妖精の気配を感じられるかと聞くとジークの答えに少し考え込むような素振りをする。

「……サイノウガアルナラタメシテミロ。サガセルモノガフエルナラ、ノエルサマヲハヤクミツケルコトガデキル」

「試してみろって言うてもな。具体的に何をしたら良いか。わからないし」

「それに仮に私とジークが妖精の魔法を突破できても単独行動は危険でしょ。さつき見たいなのできたら1人じゃ無理だし」

ギドはジークとフィーナの事を高く評価しているようで簡単に妖精の魔法を感知してみるように言うがジークとフィーナは簡単にできる事では思っていないため、首を横に振る。

「マホウハサイノウダ。デキナイモノハドレダケドリヨクシヨウガデキナイ。スクナクトモオマエタチハマリヨクヲカンチデキル。ソレニ、スクナクトモ、オマエタチハヒトリデモサツキノモノガデテキテモニゲキルコトハデキルダロ？」

「まあ、動きも遅いし、逃げるだけなら……さつきも無理に戦う必要ってなかったんじゃないか？」

ギドの言葉にジークは魔導銃キャリバーを壊してまで戦う相手ではなかったと思ったようで大きくため息を吐くと、

「とりあえず、やるだけやってみるが、ノエルだと逃げる事もできなさそうだ……と言うか、石の人形みたいな魔導人形は言葉なんか通じないのに話し合いで解決しようとしてずっと話しかけてそうだから、時間はないだろうし」

「……否定できないのが痛いわ」

「……ソレニカンシテハドウイケンダ」

ジークはノエルを探す手掛かりになるならとギドの提案に乗るがその理由にフィーナとギドは眉間にしわを寄せる。

「ジカンガナイ。カンタンニセツメイスルゾセントウニツカウワケデモナイ。マリヨクヲカンチスルノハデキルナ？」

「ああ。そこにも魔力の高いところがある」

「……マリヨクガタカイカシヨハヨウセイガナニカヲシカケテイルカノウセイガタカイ。ソコヲサガシテイケバイイ」

「……それって結局は全部探せって事だろ？」

「ハヤイハナシガソウダ」

ギドの説明にジークは結局は現状では怪しいところを確認して行く事しかできない事に大きく肩を落とし、

「とりあえず、俺はそこに行くから」

「ええ、私はしばらくギドと歩くわ」

ジークは魔力を感じる壁を押すと手は壁の中をすり抜けて行くため、ジークは単独行動に移る。

第34話

「……やっぱり、ダメだろ」

ジークはフィーナ達と別れて遺跡の中を歩いているが妖精のいたずらに惑わされてしまったようで完全に迷子になってしまふ。

「……さてとどうするかな？ 戻るとしても合流できる自信はないな」

ジークの視線の先には自分が迷子になったと確信した先ほど倒した石の人形が転がっており、ジークは大きくため息を吐くと、

「ん？ 何か光ったか？」

ジークは改めて妖精のいたずらに惑わされないように集中しようとした時に倒れている石の人形のそばが弱々しい光を放ち、ジークはその光に何かを感じたようで石の人形のそばまで歩き、

「動き出したりしないよな？ ……これが光ったのは？」

近づいては見た物の先ほど苦労して倒したため、1人では対処できないと思っており、警戒をしているが石の人形の身体のそばには小さく光る赤い球体が転がっている。

「これって、たぶん、こいつのコアだよな？ なら、動く事はないと思うけど」

ジークは赤い球体を拾い上げると石の人形が動かない事に安心した

ようで大きくため息を吐き、

「まあ、何かの役に立つかな？ 貴重なものではあるわけだし、それに魔導銃キャリバーの修理に使えれば儲けものだし」

ジークは赤い球体を懷にしまうとノエルの探索に戻ろうと妖精のいたずらを見極めるために目を閉じて集中する。

「ん？ ここが1番、おかしい気がする？ そう言えば、フィーナ達はこの辺から出てきたよな？ ノ、ノエル？」

「……あ、あの。ジークさん」

ジークはフィーナ達が突然現れて石の人形に攻撃した事を思い出して壁に手を伸ばした時に目の前にはノエルが現れ、ジークの伸ばした手はノエルの胸に触れ、彼女の顔は真っ赤に染まって行き、

「ま、待つて。ノエル、こ、これは事故なんだ！！ わざとじゃない！！」

「は、はい」

ジークは慌ててノエルに謝罪するとノエルは顔を真っ赤にしたままうつむいてしまい、

「あ、あの。ノエル、1人で大丈夫だった？ 魔物とか、こんなのに襲われなかったか？」

「は、はい。わたしは大丈夫です」

ジークは話を変えようと1人だったノエルを心配するとノエルは大きく頷くと、

「それじゃあ。ノエルと合流できたわけだし、次はフィーナやギド達と合流しないと危ないから、こんなのが何体も出てきたら対処何が出来やしない」

「そうなんですか？」

「ああ。やつと倒した感じだしね。機械的に生み出された魔法機械じゃ、俺の魔導銃^{キャリバー}ではたいしたダメージも与えられないから」

ジークは先ほど胸を触ってしまったため、2人つきりは気まずいため、フィーナ達と合流を急ごうとするがノエルとは目を合わそうとはしない。

「ノエル、フィーナ達の居場所はわかったりしないよな？」

「わかっていたら、もっと早く合流できました」

「それもそうだ。妖精達のいたずらを止める手立てがあれば楽なんだけど、どうにかならないかな？ ……あれ？ ノエルは妖精達のいたずらを止められる事ってできないかな？」

ジークはこの遺跡が迷宮化している原因である妖精達をどうにかできないかと考え始めたようである。

第35話

「いたずらを止めるですか？」

「ああ。魔法機械こんなのが他にいないとは限らないし、そう考えるとまとまって歩かないと不味いだろ。それに夜が明けたら冒険者達も押し寄せてくる。ノエルは隠せるかも知れないけど、ギド達は危ないだろ。手さぐりで奥を探して道に迷うよりは先にそっちを解除した方が効率が良いかも知れない」

ジークはノエルやギドの事を考えると悠長に時間をかけている事が出来なかった事を思い出し、先に妖精達のいたずらを止める事に決めるが、

「で、ですけど、妖精さんと話し合いをするにしてもどうしたら良いんでしょうか？」

「そうなんだよな」

方法に心当たりがあるわけもなく、2人で首を傾げる。

「……一先ずは魔力が強いところを探すしかないのか？」

「魔力が強いところですよね？ ……わたしが見たところだとあの灯りが点いたところが1番、妖精さん達が多くて魔力が強かったと思いますけど」

「……そこかよ。考えるとそこ以外にあり得ないか」

ジークはギドの言っていた魔力が強い場所を探そうとするがノエルは首を傾げたままギド達と会った場所が1番だと言い、ジークはどうして今まで気付かなかった事に眉間にしわを寄せ、

「一先ずはこっちだったか？」

「違いますよ。こっちです」

「ノエル、何を言ってるんだ。俺はこっちからきたんだぞ。それに……あれ？」

ジークは先を目的の場所に戻ろうとするがノエルはジークとは反対のジークが歩いてきた方向を指差すとジークは1つの違和感を持つ。

「どうしたんですか？」

「いや、ギドの魔法で石の人形が倒れたのは前のめりだったから、ノエルの指差す方に進むとして、それなら、俺はどうしてこっちからきたんだ？」

「壁をすり抜けているうちに戻ってきてしまったんじゃないですか？」

ジークは改めてこの場所に戻るように進んできていなかった事に首を傾げるとノエルは妖精のいたずらで完全に惑わされているのではないかと首を傾げるが、

「いや、もしかしたらなんだけど……」

「ジークさん、そこには魔力を感じませんから、何も無いんじゃない

いですか？」

「……いや、妖精達は確かに魔力があるからそれを察知して進んできたんだけど、魔力が感じなかったところは調べていないんだよ。魔導機械があるんなら、妖精の魔力以外でも惑わす何かがあるかも知れない」

ジークは今の自分達は妖精だけではなく、他の原因もあるのではないかと魔力の感じられない壁を調べ始める。

「……ノエル、ここの壁って魔力は感じないよな？」

「はい。妖精さん達は感じられません」

「だよな……でも」

ジークは魔力が感じられない壁の1個所で何か気になるものがあつたようでノエルに魔力の確認を頼むが魔力が感じられない壁の中にジークの腕は埋まって行き、

「ど、どう言う事ですか？」

「さつきも言っただけど、妖精達のいたずらにとられ過ぎて真実が見えてなかった。壁があるように見えてもないところは魔力だけで偽装されているわけじゃないんだ」

「そ、それこそ、どうしたら良いかわからなくなったんじゃないですか？」

ジークは妖精の魔力だけを追いかけたいとはいけないと言うがそれ

はこの遺跡をさらに迷宮化しているだけである。

第36話

「……確かにそう言われればそうか。参ったな」

「ですよね」

「……一先ずはギド達は魔法を見てくだろうから、俺達は魔導機械こうちかな？ ……いや、違うな」

ジークはノエルの言葉に頭をかくとフィーナやギドとは違ったアプローチで遺跡の奥を探し出そうとするがジークはまた、何かが引つかかったようである。

「どうかしたんですか？」

「いや、俺達はノエルやギドが妖精の魔力を感じたからそっちを原因として探してきたわけだろ。妖精は何の目的があつて道を隠しているんだ？ この遺跡に来た人間を騙して何になる？」

「それはわかりませんが、妖精さんはいたずら好きなのはみなさんも知っている事ですよね？」

ジークは妖精達にもいたずら以外にも目的があるのではないかと考え始めたようだがノエルはジークの疑問に答える事は出来なく、首をかしげており、

「……そうなんだけどな。遺跡の奥の魔剣だか聖剣を取られると人が来なくなるからか？ だとしても、限度つてものがあるだろ。それも、こんな人が来るかどうかともわからないより、人にいたずらを

するなら外に出た方が効率が良い」

「……えーと、妖精さん達って効率とかって考えるんですかね？」

「何事も効率的に合理的に人間も妖精も一緒だろ？」

ジークは妖精達が遺跡の奥にとどまっている理由がわからないように首をひねっている様子にノエルはジークが効率と言うのは妖精にはジークと同じ考えを持つものはいないと苦笑いを浮かべるがジークは人間以外にも効率を考えて動くものは必ずいると笑う。

「そうでしょうか？」

「ノエルだって一緒だろ。俺の両親は人間の勇者で名前が知れ渡っているから考えを変える事ができたら、早く解決するかも知れないからだろ。それに探すより、うちで待っていた方が効率的だと思ったわけだろ。目的のために考えれば行きつくのは合理的に効率的に動く事に行きつく」

「……確かにそうかも知れませんが」

しかし、ノエルにはジークの考えが理解できないため、首を傾げるとジークはノエルも効率的に動いた結果であると言い、ノエルは納得できなさそうだがそれでも自分の行動と重ねてしまったため、何も言えないようであり、

「だ、だとしたら、妖精さん達はなんの目的があっていたらずらをしているんですか？」

「そりゃあ、遺跡の奥を隠すためだろ」

「それだと矛盾しませんか？」

ノエルはジークの考えている事がわからないようで妖精の目的を聞くがジークはくすりと笑うと、

「前提目的が違う可能性があるんだよ。俺達は妖精はただ、遺跡に入って来た人間にいたずらをするのが目的だと思っていた。それが妖精だから」

「はい。妖精さんはいたずらが大好きですから」

「それが今回に限ってはもしかしたら間違いだって可能性はないか？」

ジークは妖精達の目的がいたずら目的ではないと疑っており、

「ど、どう言う事ですか？」

「妖精は長寿だろ。そして、ずっとこの場所にとどまっていた。この遺跡の奥の物を世に出さない事を目的としていたら？」

妖精の目的は遺跡の奥に眠るものを守っている可能性が高いと言う。

第37話

「この遺跡を作った人間はかなり高位の魔術師で魔導機械に詳しい人物。妖精を従える事が出来るような。だから、魔導機械と妖精達が2つの特徴を生かして奥への道を塞いでいる」

「妖精さんを従えるって、そんな事ができるんですか？」

「従えるは言い方が悪いけど、彼らが遺跡の奥を隠したがるくらいに妖精達を心を通わせていたんだろ」

ジークは推測でこの遺跡を作り上げた人間像を話すとノエルは真面目な表情をし、

「ジークさんの言う事が正しいなら、わたし達は奥に必ず行かないといけないですね。妖精さん達と心を通わせる事が出来た人なら、わたしと同じ事を考えたかも知れません。奥に眠っているものを魔^{わたし}族と人族の争いの火種にはいけないと思います」

「まあ、希望的なものも入ってるけどな……もし、ノエルが望んだ世界を夢見た人がいたなら、その想いに答えてあげたいな」

ノエルは自分の理想と同じものを掲げた人間がこの遺跡の奥に住んでいたと決めつけ、気合いを入れるように両手のこぶしを握りしめるとジークは苦笑いを浮かべながらもノエルの考えには賛同しているようで彼女の肩に1度、手を置くと、

「何の手がかりもないなら、予想を立てて動くしかない。最初はギド達と会った場所を調べ直そう。ギドの話信じれば俺達がああ場

所に着いた時に灯りが点いた。もしかしたら、何か条件があった可能性もある」

「ギドさん達だけでは起きない何かがあったわけですか？」

「ああ」

ギド達と遭遇した灯りの点いた場所に戻ろうと2人で歩きだす。

「あ、あの。ジークさん」

「何だ？」

「灯りが点いた条件ってなんだと思います？」

目的の場所を探し始めてしばらくするとノエルはジークが気にしている場所の条件が知りたいよううで首を傾げた時、

「……着いたな」

「灯りが点きました」

目的の場所にたどり着いたよううで先ほどまでは暗かったはずの遺跡の中が明るくなる。

「条件は推測だ。ギド達だけでは灯りが点かなかった事を考えるとドレイクみたいな高位の魔族がいらないか？ もしくは俺達、人間か？ その2種族が一緒にいるのが条件かも知れないな」

「わたしとジークさんがいるからですか？」

「道を惑わされていた事を考えるとな。1人の時はここにたどり着かなかった。もしくはたどりついていても灯りが点いていなかったから、ここだと気付かなかった可能性もある」

ジークはこの場所で灯りが点くのは異種族が共にいる事が条件ではないかと予測を立てていたようであり、

「ノエル、何かないかを探そう。俺の予想が正しければこの場所に遺跡の奥へ続く道がある。ノエルは壁にある魔力を見てくれ。俺は魔力をまったく感じないところに仕掛けはないかを見るから」

「は、はい」

ジークはノエルにこの場所を探索しようと言うと近くの壁を調べ始め、ノエルは目を閉じて妖精達の魔力に集中し始めるが、

「あ、あの。ジークさん、この場所なんですけど、妖精さん達の魔力を感じないんですけど」

「……ああ。俺も思った。魔力は感じるけど妖精とは違う気がする」

ジークとノエルも同じ事を感じたようで顔を見合わせる。

第38話

「これって、どう言う事ですか？」

「わからないけど、何かないか調べるしかないな……悪い。ノエル」

「どうかしましたか？」

ジークは壁を調べようと不用意に手を伸ばした時、ジークの耳には「カチっ」と小さな音で何かのスイッチを押したような音が聞こえるが小さな音だったため、ノエルの耳には届いていなかったようであり、

「……俺、今、変なスイッチを押したかも知れない」

「それって、何が起きるかは」

「……わかつたら、嬉しいね」

ジークは顔を引きたせながら、失敗した事を告げるとノエルはジークから少し距離を取るように後ろに下がり始め、

「とりあえず、この手を避けてみたいんだけど、何かあるかわからないから防御系の支援魔法とかをかけてくれると嬉しいんだけど」

「そ、そうですね。何かあるかはわかりませんが、畏って可能性はありますし」

2人は最悪の事を考えてノエルは支援魔法に移ろうとした時、「ガ

ラガラ」と大きな音を立てて何かが崩れて行くような音が2人に向かって近づいてきており、ジークはその音が壁の奥から自分に向かって近づいてきている事に気づく。

「……ノエルさん、俺、死ぬかも知れない」

「な、何を言ってるんですか。あ、諦めちゃダメです!!」 と言うか、明らかに何かが近づいてきてるんだから、離れてください!!」

「それも、そうだな」

ジークは自分に迫ってきている恐怖に顔を引きつらせたまま動かずにいるとノエルはジークに壁から離れるように言い、ジークは慌てて壁から離れると今までジークが立って場所の足元と壁は崩れ落ち、

「階段？」

「ですね」

足元には下に続く階段が現れる。

「どうする？ 下に行くか？ フィーナ達を待つか？」

「で、でも、時間がないんですよ？」

「それはそうなんだけど、壁が崩れ落ちたんだぞ。下で何かあったら、絶対に生きて戻ってこれないし」

派手に壁が崩れ落ちた事に2人は先に進まないといけない事はわかりながらも踏ん切りはつかないようで顔を見合わせると、

「で、でも、行かないといけないんです。行きましょう。だ、大丈夫です。きつと行けます。ジークさんが居てくれると凄く心強いですから」

「ノエル……わかった。行ってみよう。ここまできたんだ」

「あ、あの。ジークさん、手を握っても良いでしょうか？」

「あ、ああ」

ジークとノエルは奥に進む事を選び、不安を振り払うようにお互いの腕を握って階段をおり始める。

「ノエル、足元に気を付けてくれよ。さっき、奥の壁が崩れていたわけだし、足元には崩れた壁がある………ない？」

「ないですね」

ジークはランタンで足元を照らしながら階段を降りるが壁の破片は階段にはなく、2人は首を傾げると、

「……やっぱり、この遺跡を作った人に俺達ってからかわれてるのか？」

「そ、そんな感じもしてきてます」

ジークとノエルは薄々、感じていた事を口に出し、

「まあ、油断していると危ないから、気を引き締めような」

「そうですね。足を出したら、階段が崩れるとかあってもイヤですね」

「……ありそう」「」

ジークとノエルは周りを警戒しながら階段を進んで行く。

第39話

「……とりあえずは下まで着いたな」

「そうですね」

2人は階段を降りると階段には何も仕掛けはなく無事に最下層まで到着すると周囲を警戒するようにランタンで周りを照らそうとする
と、

「灯りが点いたな」

「はい……」

先ほどと同様に灯りが灯り始め、奥に続く1本の道が繋がっている。

「……誘われてるのかな？」

「わからないですけど、奥に行くしかありませんよね」

「まあな……」

2人は遺跡の奥に誘い込まれている感じがするが先を進む事しか2人には選択肢がないため、前に進むとするが、

「ジークさん、何かあるんですか？」

「いや、ノエルと2人になってからは順調に進んでいると言う気がするからな。さっきも言ったけど誘われてる気がするんだよ。俺と

ノエルの2人で条件がそろったのかも知れない」

ジークはこの遺跡は侵入者を選んでいる可能性が高いと確信したように大きく頷き、

「行こう。この先にあるものはきっとノエルの役に立つものだ……そんな気がする。たぶん、ギドが言っていたような聖剣とか魔剣の類ではないと思うんだ」

「はい。わたしもそんな気がしてます」

ジークとノエルは直観的にだがこの奥にあるものは武器ではないと感じたようで2人で歩きだす。

「開けるぞ」

「はい」

1本道を進むと奥には両手開きの大きなドアがあり、2人は大きく頷くと息を合わせるようにドアを開くと、

「……部屋？ 居住スペースってところかな？」

「そうみたいです」

遺跡の主がなくなってから、掃除が行われているわけもないため、埃が厚く積もった部屋であり、2人は中を見渡すとこの部屋には中央に丸型のテーブルが1つそして部屋の形は四角形であり、壁にはジークとノエルが入ってきたドア以外にも3方向に部屋があるようである。

「とりあえずはこの部屋から調べるか？」

「でも、この部屋には何も無さそうですけど、3つの部屋に入るための居間って感じがしますけど」

「確かに目立った物はテーブルしかないか。それじゃあ、どこから行くかな？」

「こう言うのって普通は中央の部屋にあっていて欲しいですよね？」

「まあ、そんな気もするけど……」

この中央の部屋には特に何も無さそうではあるが2人は中央のテーブルまで歩き、3つの部屋、どこから調べようかと話をするとなエルは自分達が入ってきたドアとは対面にあるドアに駆け寄り、ドアを開こうとするが、

「……開かないですね」

「カギがかかってるんじゃないか？ カギは他の2つの部屋にあるのかもな」

ドアは開く事はなく、ジークはドアを調べるとドアには小さなカギ穴があり、このままではドアは開かないようであり、

「とりあえず、他の部屋もカギがかかってないか調べてカギがかかってない部屋から調べようか？」

「そうですね。とりあえずはあっちを見てみましょう」

「ああ」

ジークとノエルは今度は入口から左側の部屋の前まで進み、

「カギはかかってなさそうだな。ノエル、開けるけど罠がないとは言えないから、注意してくれ」

「はい」

ジークはドアのノブに手をかけると部屋の奥から何か出てくる可能性も考えられるため、ノエルを後ろに下げるとゆっくりとドアを開ける。

第40話

「……寝室かな？」

「そうみたいですネ」

ドアを開けると部屋は寝室のようであり、人間サイズのベッドと本棚などが置かれている。

「とりあえずは力ギもだけど、何か使えそうなものはないか？」

「使えそうなものですか？ 勝手に良いんですか？」

「遺跡探索で見つけた物は正当な報酬だよ。勝手にって言うけど、この部屋の状況や遺跡の入口が埋まっていた事を考えるとずいぶん昔にこの部屋の主はなくなっているわけだしね」

ジークは魔導銃^{キャリバー}を片方潰してしまった事もあるため、何か収入になるものを回収しないと割に合わないためか部屋を物色し始め、

「本は……読めないな。ノエルは読めそうか？」

「いえ、見た事もない言葉です」

「ギドなら何か読めるのかな？ 数冊、見て貰うか？」

本棚の本を開くが2人が読む事のできない文字で書かれており、2人は首を傾げるとジークは魔法使いであるギドなら読める本も混じっているかも知れないと考え、適当に2冊本を取った時、

「ジークさん、これってここに住んでいた人ですかね？」

「ん？ 待つて、今行くから」

ノエルが何かを見つけたようでジークを呼ぶ。

「ここに住んでいた人達って？ 絵か？」

「はい。それもこの女性の方なんですけど」

「こんじき金色の瞳に2本の角？ この人ってドレイクか？」

ノエルは壁にかけてあった絵に何かを感じたようでジークはノエルが気になってる絵を覗き込むとそこには1組の男女の絵が描かれており、その女性にはノエルと同じようにドレイクの象徴でもあるこんじき金色の瞳と2本の角が描かれている。

「たぶん、そうだと思います。そして、男性の方は」

「人間っぽいよな。昔にもノエルと同じ考えを持った人達が居たって事か？ でも……」

「そうですよ。きっと居たんです」

男性の方は人間のように見え、ジークはノエルが考えている種族間の争いを阻止しようと思った人達は居たのだと思ったようだがこの2人がこんな遺跡の奥に住んでいた事や今の世界に種族間の争いは絶えない事にその考えは失敗した事は直ぐに理解でき、言葉を飲み込むがノエルは自分と同じ考えがいたと言う事実だけしか見えてい

ないようで笑顔を見せる。

「まあ、実際はわからないな。絵だし、ここに住んでいた人とは限らないわけだしな。それより、カギを探そう。時間はあまりないし」

「は、はい。そうですね」

ジークはノエルの様子にこの2人が失敗した事は話さないと決めると奥の部屋のドアを開けるためにカギ探しを再開させようとした時、

「ジーク、ノエル、いる？」

「フィーナさん、ギドさん」

フィーナとギド達ゴブリンが階段を見つけて追いかけてきたようでドアから顔をのぞかせ、

「追いついたか？」

「アア、シバラクアルイテイタラ、イキナリアカリガツイタカラナ」

「フィーナとギド達は一緒に歩いていたのか？」

「ええ、それも通り過ぎた後に後ろで灯りが点いたのよ。意味がわからないわよ」

フィーナとギドは灯りが点いた後に部屋を見つけたようであり、

「そうか……ってなると、やっぱり、カギはドレイクと人間か？」

「何？　どうかしたの？　ジーク」

ジークは考えていた条件が正解だった事に何かあるのか考えるような素振りを見るとジークの様子にフィーナは首を傾げるが、

「いや、何でもない。ギド、悪いんだけど、ここの本棚の本を見てくださいか？　俺とノエルじゃ読めなかったから、何かないかと思っただけ」

ジークは何もないと言うとギドに部屋にある本を調べて欲しいと頼む。

第41話

「……コレハイマヨリカナリマエノマハウモジダナ。ワカッタ。ソノカワリタンサクヲマカセルゾ」

「ああ。それじゃあ、人数も集まったし、俺はもう1つの部屋を見に来る」

ギドは本を1冊手に取るとパラパラとページをめくり、何とか読めそうだと頷き、部屋を出ようとするが、

「フィーナ、お前はおかしな事をやって物を壊すなよ」

「ジーク、あんたね」

振り返ると先ほど、祖母の部屋をめちやくちやにされた事もあるため、フィーナに足を引っ張るなど釘を刺し、フィーナの怒りの声が部屋には響き、

「あ、あの。フィーナさん」

「わかってるわ。ノエル、手伝う事ってある？」

「は、はい。お願いします。私では届かない場所もありますから」

ノエルはジークとフィーナの様子に苦笑いを浮かべながらも部屋の探索に戻る。

「……こっちは何があるかな」

ジークはフィーナが怒りに任せて自分を追いかけてこない事に少しだけ安心したように口を緩ませながらも寝室の対面にある部屋のドアを開けると、

（キッチンみたいな感じかな？ …… そうなるとカギがあるとしたらあっちの部屋かな？ まあ、何かあるかも知れないし）

こちらの部屋はキッチンのもようであり、遺跡の入口が埋まっていた事から考えると大きな地震が過去にあった事が理解出来るくらいに食器が床に落ちたのだろっか床には食器だったものが砕けて散らばっている。

（…… こっちはずいぶんと荒れてるな。寝室はキレイになっていたのに、まあ、魔術師が住んでいたみたいだから、本には被害がでないような魔法がかかっていたのかな？）

ジークはまだ原型をとどめている皿を一枚拾いあげながら、寝室とのあれ具合の差に疑問を持ちながらも食器棚に目を移すと、

（ん？ これって、魔法薬か？ だとしてもいつのものかわからないし、使えるかは微妙だな）

いくつか、割れていない小瓶が置いてあるのに気づき、手に取るがこの遺跡がいつの時代のものかかわらないため、眉間にしわを寄せながら魔法薬の状態を確認しようとふたを開ける。

（…… と言うか、効果も効能もわからないしな。過去の魔法薬なら分析しても何かわからないかも知れないし、それでも何かわかれば良いか。ばあちゃんの本に書いてあるものかも知れないし）

ジークは魔法薬に価値がないと思ったようだが手ぶらでは帰るわけにもいかなかったため、魔法薬をカバンの中につめ始めると、

（ん？ 何だ。これ？ …… 宝石？ 何かのコア？）

魔法薬の小瓶が置いてあったところの奥に先ほど石の人形に使われていた赤く光る石の一回り小さい石がある事に気づき、手を伸ばし、

「これ、さっきの石の人形のコアに使われてたものと同じだよな？ …… 今更だけど、あのドアを開けたら、びつしりと並んだ石の人形とかあつたりして」

あまり考えたくない悪い考えが頭を過り、顔を引きつらせた時、

「ジーク、カギ、有ったよ」

「はい。ジークさん、見つけました」

カギを見せびらかすように手に持ったフィーナがドアから顔を覗かせ、フィーナに続くようにノエルも顔をのぞかせ、

「ああ。こっちはこれと言った収穫はなしだ」

「そうなんですか？」

「それなら、早くこのカギでドアを開けようよ。お宝とのご対面よ」

ジークは2人の声に驚いたようではなぜか慌てて赤い石をポケットにねじ込むがノエルもフィーナもジークの行動には気付かなかったよ

うでカギのかかった部屋のドアを開けようとジークを呼ぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933w/>

勇者の息子と魔王の娘？

2011年11月13日21時52分発行